祝谷畑中遺跡 2 次調査
道後今市遺跡 7 次調査
道後今市遺跡 11 次調査

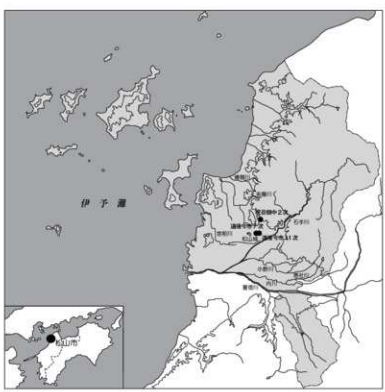
国庫補助市内遺跡発掘調査報告書

2011

松山市教育委員会

祝谷畑中遺跡 2 次調査
道後今市遺跡 7 次調査
道後今市遺跡 11 次調査

国庫補助市内遺跡発掘調査報告書



2011

松山市教育委員会

巻頭図版 1　道後今市遺跡 11 次調査出土石鏃

序

本書は、個人住宅の建築に伴う本発掘調査として国の補助を受けて実施した祝谷畑中遺跡2次調査、道後今市遺跡7次調査、道後今市遺跡11次調査の発掘調査報告書です。

これらの3遺跡は松山平野北部に所在する道後城北地域に所在しており、これまでの発掘調査によって縄文時代から近世にかけての集落関連遺構が多数確認され、特に弥生時代においては瀬戸内地域を代表する拠点集落が存在していたことが明らかとなっています。

道後今市遺跡11次調査では、縄文時代の石錘がまとまって出土しました。このことは周辺地域において縄文時代の集落が存在していることを示すものです。また道後今市遺跡7次調査では、調査地が明治時代に平形銅剣10本が出土したと伝えられる地点でもあるため、その情報取得に努めましたが、直接的な資料は得ることができませんでした。しかし、弥生時代中期後半の大溝を検出し、今後弥生時代集落の構造を知るうえで重要な資料を得ることができました。一方、祝谷畑中遺跡2次調査では、12世紀後半に人為的に掘削されたと推定される断面V字形の溝を検出しました。これは当時の集落の様相を知るうえで貴重な手がかりとなるものです。

こうした発掘調査成果は、松山平野北部の縄文時代から中世における集落様相の解明や当時の自然環境を復元するうえで貴重な資料となるものです。

最後になりましたが、発掘調査にご協力をいただきました土地所有者の方々、関係各位に厚くお礼申し上げます。

平成23年3月31日

松山市教育長　山内　泰

例　言

1. 本書は、松山市教育委員会･財団法人松山市生涯学習振興財団（現：財団法人松山市文化･スポーツ振興財団）が国庫補助事業として平成元･9･17年度に松山市道後城北地区において実施した埋蔵文化財の発掘調査報告書である。

2. 本書の刊行を目的とした整理作業は、財団が市教委より委託を受けて、平成21年7月1日から平成22年3月31日までの間に実施した。なお、出土物整理作業として国から補助を受けている。

3. 本文中では遺構名を略号化し、竪穴住居：ＳＢ、掘立柱建物：掘立、溝：ＳＤ、土坑：ＳＫ、柱穴・小穴：ＳＰ、性格不明遺構：ＳＸで記述した。

4. 本書で使用した標高数値はすべて海抜標高を示し、方位は国土座標を基準とした真北である。

5. 基本土層や遺構埋土の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』(1988)に準拠した。ただし、一部の遺跡では使用していない。

6. 屋外調査での写真は調査担当者と大西朋子が、遺物写真と図版作成は大西が担当した。

7. 遺構の実測は宮内慎一･河野史知･山之内志郎、遺物の復元及び実測･製図は相原浩二･高尾和長･山本健一･宮内･河野･山之内の指示のもと猪野美喜子･金子育代･木西嘉子･仙波千秋･田崎真理･多知川富美子･中村紫･西本三枝・萩野ちよみ・平岡直美・山下満佐子・吉井信枝が行った。

8. 挿図の縮尺は縮分値をスケール下に記した。遺物実測図は原則として、縄文土器・弥生土器は1/4、土師器・須恵器・陶磁器・石器は1/3、金属製品は1/2とした。

9. 調査では財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター多田仁氏にご指導、ご教示を頂いた。記して感謝申し上げます。

10. 本書の執筆は重松佳久の指示のもと宮内・河野・山之内が分担し、編集は山之内が担当し中村の協力を得た。浄書は山之内の指示のもと中村が担当した。なお、編集はAdobe　InDesignCS4にて行い、図面はデータ入稿であるが、写真図版はスキャナ分解によった。

11. 本書に掲載した記録類や遺物は、松山市立埋蔵文化財センターにおいて保管されている。

本 文 目 次

第１章　はじめに　……〔山之内〕……1
1. 調査の経過
2. 整理・刊行組織
3. 地理的環境
4. 歴史的環境

第２章　祝谷畑中遺跡２次調査　……〔河　野〕……9
1. 調査の経過
2. 層位
3. 遺構と遺物
4. 小結

第３章　道後今市遺跡７次調査　……〔重松・宮内〕……25
1. 調査の経過
2. 層位
3. 遺構と遺物
4. 小結

第４章　道後今市遺跡 11 次調査　……〔山之内〕……51
1. 調査の経過
2. 層位
3. 遺構と遺物
4. 小結

第５章　調査の成果と課題　……〔山之内〕……75

挿 図 目 次

第１章　はじめに

第 1 図 周辺遺跡分布図（縮尺１：20,000） …… 4

第２章　祝谷畑中遺跡２次調査

第 2 図 調査地位置図（縮尺１：2,500） …… 12
第 3 図 土層図（縮尺１：100・１：50） …… 14
第 4 図 遺構配置図（縮尺１：100） …… 15
第 5 図 ＳＤ１測量図（1）（縮尺１：60） …… 16
第 6 図 ＳＤ１測量図（2）（縮尺１：60） …… 17
第 7 図 ＳＤ１出土遺物実測図（縮尺１：4・１：3・１：2） …… 17
第 8 図 ＳＤ２測量図・出土遺物実測図（縮尺１：30・１：3） …… 18
第 9 図 ＳＤ３測量図・出土遺物実測図（縮尺１：30・１：3） …… 19
第 10 図 ＳＰ１・２測量図（縮尺１：20） …… 19
第 11 図 ＳＰ３測量図（縮尺１：20） …… 19
第 12 図 ＳＰ４測量図（縮尺１：20） …… 20
第 13 図 ＳＰ５・６測量図（縮尺１：20） …… 20
第 14 図 第Ⅳ層出土遺物実測図（縮尺１：4・１：3・１：2） …… 21

第３章　道後今市遺跡７次調査

第 15 図 調査地位置図（縮尺１：3,000） …… 27
第 16 図 遺構配置図（縮尺１：80） …… 28
第 17 図 調査区土層図（縮尺１：60） …… 30
第 18 図 掘立１測量図・出土遺物実測図（縮尺１：50・１：4） …… 31
第 19 図 ＳＤ１測量図・出土遺物実測図（縮尺１：40・１：4） …… 32
第 20 図 ＳＤ２測量図（縮尺１：60） …… 34
第 21 図 ＳＤ２遺物出土状況図（縮尺１：60・１：8） …… 35
第 22 図 ＳＤ２下層出土遺物実測図（縮尺１：4） …… 36
第 23 図 ＳＤ２上層出土遺物実測図（縮尺１：4） …… 37
第 24 図 ＳＫ１測量図（縮尺１：40） …… 37
第 25 図 ＳＫ２測量図（縮尺１：40） …… 38
第 26 図 ＳＫ３測量図（縮尺１：40） …… 38
第 27 図 ＳＫ４測量図・出土遺物実測図（縮尺１：40・１：4） …… 39
第 28 図 包含層出土遺物実測図（縮尺１：4・１：3） …… 41
第 29 図 グリッド出土遺物実測図（1）（縮尺１：4） …… 41
第 30 図 グリッド出土遺物実測図（2）（縮尺１：4・１：3・１：1） …… 42

第31図 撹乱・トレンチ出土遺物実測図（1）（縮尺1：3） …… 42
第32図 撹乱・トレンチ出土遺物実測図（2）（縮尺1：4・1：2） …… 43

第4章　道後今市遺跡11次調査
第33図 調査地位置図（1）（縮尺1：3,000） …… 53
第34図 調査地位置図（2）（縮尺1：1,000） …… 54
第35図 北壁・東壁・南壁土層図（縮尺1：60） …… 56
第36図 遺構配置図（縮尺1：80） …… 57
第37図 ＳＫ1測量図（縮尺1：20） …… 58
第38図 ＳＫ1出土遺物実測図（1）（縮尺1：3） …… 59
第39図 ＳＫ1出土遺物実測図（2）（縮尺1：3） …… 60
第40図 ＳＫ1出土遺物実測図（3）（縮尺1：3） …… 61
第41図 ＳＢ1測量図・出土遺物実測図（縮尺1：40・1：6・1：4・1：2） …… 62
第42図 ＳＫ3・5測量図・出土遺物実測図（縮尺1：30・1：4） …… 63
第43図 ＳＤ2測量図（縮尺1：20） …… 64
第44図 ＳＤ1測量図・出土遺物実測図（縮尺1：50・1：4） …… 65
第45図 ＳＸ1測量図・出土遺物実測図（縮尺1：40・1：4） …… 66
第46図 ＳＫ2・4・6測量図（縮尺1：30） …… 67

表　目　次

第1章　はじめに
表1　調査地一覧 …… 1
表2　祝谷畑中遺跡・道後今市遺跡調査地一覧 …… 2

第2章　祝谷畑中遺跡2次調査
表3　溝一覧 …… 22
表4　ＳＤ1出土遺物観察表　土製品 …… 22
表5　ＳＤ1出土遺物観察表　鉄製品 …… 23
表6　ＳＤ2出土遺物観察表　土製品 …… 23
表7　ＳＤ3出土遺物観察表　土製品 …… 23
表8　第Ⅳ層出土遺物観察表　土製品 …… 24
表9　第Ⅳ層出土遺物観察表　鉄製品 …… 24

第３章　道後今市遺跡７次調査

表 10　掘立柱建物一覧 …… 44
表 11　溝一覧 …… 44
表 12　土坑一覧 …… 45
表 13　柱穴一覧 …… 45
表 14　掘立１出土遺物観察表　土製品 …… 45
表 15　ＳＤ１出土遺物観察表　土製品 …… 46
表 16　ＳＤ２出土遺物観察表　土製品 …… 46
表 17　ＳＫ４出土遺物観察表　土製品 …… 47
表 18　包含層出土遺物観察表　土製品 …… 47
表 19　グリッド出土遺物観察表　土製品 …… 48
表 20　グリッド出土遺物観察表　石製品 …… 49
表 21　撹乱・トレンチ出土遺物観察表　土製品 …… 49
表 22　撹乱・トレンチ出土遺物観察表　鉄製品 …… 50

第４章　道後今市遺跡 11 次調査

表 23　竪穴住居一覧 …… 71
表 24　溝一覧 …… 71
表 25　土坑一覧 …… 71
表 26　性格不明遺構一覧 …… 71
表 27　ＳＫ１出土遺物観察表　石製品 …… 72
表 28　ＳＢ１出土遺物観察表　土製品 …… 73
表 29　ＳＢ１出土遺物観察表　石製品 …… 73
表 30　ＳＫ５出土遺物観察表　土製品 …… 73
表 31　ＳＤ１出土遺物観察表　土製品 …… 74
表 32　ＳＸ１出土遺物観察表　土製品 …… 74

図　版　目　次

巻頭図版1　道後今市遺跡 11 次調査出土石錘

第２章　祝谷畑中遺跡２次調査

図版１　1. 調査前全景（西より）
　　2. 遺構検出状況（北より）
図版２　1. 遺構検出状況（南より）
　　2. 遺構検出状況（東より）

図版３　1. 遺構完掘状況（南より）
　　2. 東壁土層（西より）
図版４　1. 遺構完掘状況（東より）
　　2. ＳＤ１完掘状況（北より）
図版５　1. 遺構完掘状況（東より）
　　2. ＳＤ１完掘状況（北西より）
図版６　1. 出土遺物（ＳＤ１：５・７・９～14、ＳＤ２：15・16、ＳＤ３：17・18、第Ⅳ層：21～23）

第３章　道後今市遺跡７次調査

図版７　1. 調査地全景（西より）
　　2. 完掘状況（西より）
図版８　1. 北壁土層（南より）
　　2. 南壁土層（北西より）
図版９　1. ＳＤ１完掘状況（西より）
　　2. ＳＤ２完掘状況①（西より）
図版10　1. ＳＤ２完掘状況②（南東より）
　　2. ＳＤ２下層遺物出土状況①（東より）
図版11　1. ＳＤ２下層遺物出土状況②（南より）
　　2. ＳＤ２上層遺物出土状況（南より）
図版12　1. ＳＫ１完掘状況（西より）
　　2. ＳＫ２完掘状況（北より）
図版13　1. ＳＫ３完掘状況（南より）
　　2. ＳＫ４半截状況（西より）
図版14　1. ＳＫ４遺物出土状況（北より）
　　2. 作業風景（西より）
図版15　1. ＳＤ２出土遺物
図版16　1. ＳＫ４出土遺物（30・32）、包含層出土遺物（34～36・39・40）、グリッド出土遺物
　　（46・58・60）、撹乱出土遺物（72）

第４章　道後今市遺跡11次調査

図版17　1. 調査前風景（南東より）
　　2. 遺構検出状況（北より）
図版18　1. 石錘出土状況①（南東より）
　　2. 石錘出土状況②（南より）
図版19　1. ＳＢ１完掘状況（北東より）
　　2. 遺構完掘状況（北より）
図版20　1. 出土遺物（ＳＫ１：３・12・14・21、ＳＢ１：23・25・26・28～31）

第1章　はじめに

1. 調査の経過

(1) 調査に至る経緯

平成元・9・17年度に、松山市祝谷二丁目及び道後一万町・道後今市町の計3ヶ所における宅地開発に伴う埋蔵文化財確認願が、各申請者より松山市教育委員会文化教育課または文化財課（以下、文化教育課又は文化財課とする。平成12年度まで文化教育課、13年度以降は文化財課に改称。）に提出された。申請地である松山市祝谷二丁目263番6は、松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地『№55・56・57北代・緑台・土居窪遺物包含地』内にあり、松山市道後一万775番1、775番7及び775番8並びに道後今市998番14は、『№68今市遺物包含地』内にあり、いずれも周知の遺跡として知られている。各申請地周辺では、財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センターや財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター（以下、市埋文センターとする。現：財団法人松山市文化・スポーツ振興財団埋蔵文化財センター）が主体となって発掘調査を行った結果、これまでに縄文時代から近世にかけての集落関連遺構が多数確認され、特に弥生時代においては瀬戸内地域を代表する拠点集落が存在していたことが明らかとなっている。

そこで文化教育課又は文化財課は確認願いが申請された各地点について遺跡の有無と、さらにはその範囲や性格を確認するために、順次試掘調査を実施した。その結果、各申請地で遺跡の存在が確認されたため、各申請者は文化教育課又は文化財課と発掘調査について協議を行い、宅地開発により消失する遺跡に対して記録保存のための発掘調査を実施することとなった。調査は、国からの補助金を受け、国庫補助事業として実施した。発掘調査は、各時代の集落構造確認などを主目的とし、道後今市遺跡7次調査及び11次調査は、文化教育課が直轄で、祝谷畑中遺跡2次調査は市埋文センターに委託して屋外調査を実施した。また、2009（平成21）年7月～翌年3月までの間に各遺跡の屋内整理及び報告書刊行作業を市埋文センターに委託して実施した。

以下、表1に本書に掲載する各調査の遺跡名・所在地などを略記する。また、祝谷遺跡・道後今市遺跡調査地一覧を表2に掲載する

表1　調査地一覧

遺跡名	所在地	面積（㎡）	屋外調査	屋内整理・報告書刊行作業
祝谷畑中遺跡2次調査地	松山市祝谷二丁目263番6	61.4	2005（平成17）年11月11日～同年11月18日	2009（平成21）年7月1日～同年10月30日
道後今市遺跡7次調査地	松山市道後一万775番1 松山市道後一万775番7 松山市道後一万775番8	379.53	1990（平成2）年2月7日～同年3月31日	2010（平成22）年1月5日～同年3月31日
道後今市遺跡11次調査地	松山市道後今市998番14	199.38	1998（平成10）年2月26日～同年3月31日	2009（平成21）年11月2日～同年12月25日

表2　祝谷畑中遺跡・道後今市遺跡調査地一覧

調査地	所在地	調査面積	調査期間	主な遺構	主な遺物	調査主体	参考文献
祝谷畑中1次	松山市祝谷四丁目	6,050㎡	平成12年7月18日～13年6月1日	竪穴住居・土坑・大溝	弥生土器・弥生土偶・石器	a	19
道後今市1次	松山市道後町二丁目	900㎡	昭和56年11月10日～同年11月14日	土坑	縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器	a	1
道後今市2次	〃　道後今市995他	800㎡	昭和57年9月9日～同年10月20日	土坑・掘立柱建物	弥生土器・土師器・須恵器	a	1
道後今市3次	〃　道後町二丁目4	2,400㎡	昭和57年7月2日～同年11月30日	竪穴住居・土壙墓・窯状遺構・溝・土坑	弥生土器・土師器・須恵器・青磁・白磁	a	1
道後今市4次	〃　道後町二丁目810	1,230㎡	昭和58年8月10日～同年9月9日	竪穴住居・掘立柱建物・土坑	弥生土器・土師器・須恵器・陶磁器	a	1
道後今市5次	〃　道後町二丁目1005-1	531㎡	昭和59年6月5日～同年6月28日	竪穴住居・土坑・墳墓	弥生土器・土師器	a	1
道後今市6次	〃　道後今市1053-1	238㎡	平成元年7月31日～同年9月16日	竪穴住居	弥生土器・土師器・須恵器	b	7
道後今市8次	〃　道後今市1065-5	379㎡	平成2年9月3日～同年10月6日	自然流路	弥生土器	b	8
道後今市9次	〃　道後北代1292-1他	653㎡	平成4年4月6日～同年9月30日	畝溝跡	土師器・陶器	b	10
道後今市10次	〃　道後今市1067	812㎡	平成5年5月17日～同年7月15日	建造物・溝・欅列・土坑	縄文土器・弥生土器・土師器・陶磁器	b	11
道後今市12次	〃　道後今市998-15	60㎡	平成10年7月24日～同年10月6日	竪穴住居・溝	弥生土器・土師器・須恵器・鉄器	b	16
道後今市13次	〃　道後北代1294	469㎡	平成14年1月21日～同年3月29日	掘立柱建物・土坑・溝・自然流路	縄文土器・弥生土器・石器・鉄器・銭貨	a	20
道後今市14次	〃　道後今市1054-7の一部	137.85㎡	平成20年2月1日～同年2月29日	土坑	弥生土器等	b	23

[調査主体]

a. 愛媛県教育委員会・財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター

b. 松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

2. 整理・刊行組織

(1) 整理組織（平成21年4月1日時点）

松山市教育委員会

	教育長	山内　泰
事務局	局　長	藤田　仁
	企画官	青木　茂
	企画官	古鎌　靖
文化財課	課　長	家久　則雄
	主　幹	森　正経
	副主幹	三好　博文

財団法人松山市生涯学習振興財団

理事長	中村　時広
事務局長兼考古館館長	松澤　史夫

埋蔵文化財センター

所長兼総務課長	白石　修一
次　長	折手　均
次　長	重松　佳久
調査担当リーダー	栗田　茂敏
(編集担当) 主　任	山之内志郎
(写真担当) 調査員	大西　朋子

(2) 報告書刊行組織（平成22年4月1日時点）

松山市教育委員会

	教育長	山内　泰
事務局	局　長	藤田　仁
	企画官	勝谷　雄三
	企画官	青木　茂
文化財課	課　長	駒澤　正憲
	主　幹	森　正経
	副主幹	三好　博文

財団法人松山市文化・スポーツ振興財団

	理事長	一色　哲昭
事務局	局　長	松澤　史夫
	次　長	砂野　元昭
施設利用推進部	部　長	中越　敏彰
埋蔵文化財センター		
	所長兼考古館館長	重松　佳久
	調査担当リーダー	栗田　茂敏
	（校正担当）主　任	山之内志郎
	（写真担当）調査員	大西　朋子

3. 地理的環境

高縄半島は瀬戸内海のほぼ中央、伊予灘と燧灘とを二分するように突き出た半島である。半島中央には標高1,232.7 mを誇る東三方ヶ森のほか北三方ヶ森・高縄山などの山塊が連なる高縄山地が形成されている。松山平野は、この高縄半島の南西部に位置し、高縄山地に源を発した石手川や重信川などの大小の河川により形成された扇状地と、下流域の沖積低地により成っている。

地質学的には西南日本内帯の領家帯に属し、この高縄山地は主に中生代に貫入した古期領家花崗岩類で形成されている。

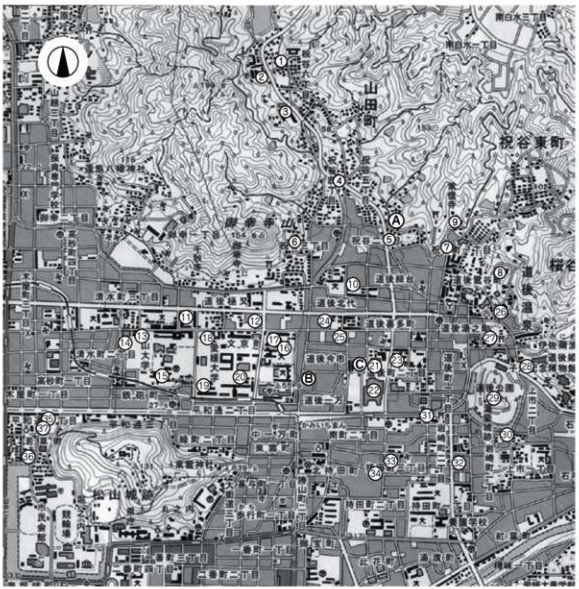
本報告を行う祝谷畑中遺跡及び道後今市遺跡の周辺は平野内でも有数の遺跡密集地帯として知られ、総称して「道後城北遺跡群」と呼ばれている。この遺跡群は東方から流れる石手川が造る扇状地上に立地し、東から西へ緩やかに傾斜し低くなっている。地理的条件や遺跡の性格などから道後地区、城北地区、祝谷地区に3区分される。

祝谷畑中遺跡2次調査が所在する祝谷地区は、城山（勝山）の北側丘陵地一帯を指している。ここでは高縄山地に源を発した永谷川と、その支流である丸山川とによって形成された開析谷を主体とし、花崗岩質洪積砂礫層からなる崖錐性堆積物及び土石流堆積物によって平野部に流れ出る付近に小規模な扇状地が形成されている。祝谷畑中遺跡2次調査地は、こうした地形の標高約47 mの地点に位置している。

一方、道後今市遺跡7・11次調査が所在する道後地区は、城山（勝山）の北東側に位置する。この地区は西側の平野部と東側の丘陵部からなっている。縄文時代以前は石手川が城山の北側を西方へ流れていたといわれており、道後今市遺跡7次調査地は、その石手川扇状地扇央付近の標高約31 mの地点、同遺跡11次調査地は標高約33.5 mの地点に位置している。

4. 歴史的環境

本遺跡を含む道後城北遺跡群には、文京遺跡をはじめとして祝谷六丁場遺跡・岩崎遺跡・持田町三丁目遺跡・湯築城跡などの多くの遺跡が存在する。ここでは旧石器時代から中世にかけての主要な遺跡について順次概要を列記する。



(S=1：20,000)

A 祝谷畑中遺跡2次調査
1 祝谷アイリ遺跡
5 祝谷畑中遺跡1次調査
9 土居ノ段遺跡
13 松山大学構内遺跡2次調査
17 文京遺跡8次調査
21 道後今市遺跡1次調査
25 道後今市遺跡10次調査
29 湯築城跡
33 持田町三丁目遺跡
37 若草町遺跡3次調査

B 道後今市遺跡7次調査
2 祝谷六丁目遺跡
6 御幸寺山東麓遺跡
10 土居窪遺跡
14 松山大学構内遺跡3次調査
18 文京遺跡9次調査
22 道後今市遺跡3次調査
26 道後湯月町遺跡
30 内代廃寺
34 持田町遺跡

C 道後今市遺跡11次調査
3 祝谷六丁場遺跡
7 湯之町廃寺
11 道後城北RNB遺跡
15 松山北高等学校遺跡
19 文京遺跡10次調査
23 道後今市遺跡5次調査
27 道後冠山遺跡
31 道後町遺跡
35 若草町遺跡1次調査

4 祝谷大地ヶ田遺跡
8 道後鷺谷遺跡
12 道後樋又遺跡2次調査
16 文京遺跡4次調査
20 文京遺跡11次調査
24 道後今市遺跡9次調査
28 道後姫塚遺跡
32 岩崎遺跡
36 若草町遺跡2次調査

第1図　周辺遺跡分布図

旧石器時代

松山平野において、この時代の遺跡としては丸山川左岸の標高120ｍの丘陵部で細石核や細石刃などが採集された祝谷丸山遺跡が知られている。しかし、現在のところ同遺跡群内では明確な遺構は確認されていない。

縄文時代

この時代の古くから知られる遺跡として、土居窪遺跡（10）・道後冠山遺跡（27）・土居ノ段遺跡（9）があり、後期から晩期にかけての縁帯文土器や注口土器などが出土している。文京遺跡８次調査(17)・９次調査（18）では後・晩期の包含層から土器が出土しているほか、道後城北ＲＮＢ遺跡（11）では縄文後期前葉と晩期後葉の包含層が層位的に確認されている。

遺構では、文京遺跡11次調査（20）では初めて明確な後期の野外炉が確認されたほか、持田町三丁目遺跡（33）や道後今市遺跡10次調査（25）では晩期の土坑を検出している。

このように縄文時代後・晩期に人々はこの地域において安定した地盤をもち、定住生活を営んでいたと考えられる。

弥生時代

弥生時代の松山平野には10の遺跡群が存在したことが想定されている。そのうち道後城北遺跡群は他の遺跡群と比較して優位にあり、中心的な存在であったことが、平形銅剣の出土集中度や舶載鏡の出土例などから明らかになってきている。

前期

前期の遺跡は沖積低地に展開している。前期前半には、文京遺跡４次調査（16）において円形竪穴式住居跡が検出されているほか、持田町三丁目遺跡では前期中葉の木棺墓を含む縦列配置の土壙墓群を検出している。また出土状況不明ながら御幸寺山東麓遺跡（6）で綾杉文が描かれた壺が出土しているほか、持田町遺跡（34）では木葉文壺が出土している。そのほか、土居窪遺跡では、鍬・櫂状木器・建築部材などの木製品が出土している。

中期

前期末から中期前半には道後姫塚遺跡（28）や道後鷺谷遺跡（8）などの丘陵地上に立地した遺跡が知られているほか、平野部に立地する岩崎遺跡（32）は前期末から中期初頭の環濠集落である。また祝谷畑中遺跡１次調査（5）は前期末から中期中葉の指標となる土器が大量に出土した大溝の検出で知られるほか、竪穴式住居では弥生土偶の頭部が出土している。中期中葉においては、祝谷六丁目遺跡（2）・祝谷六丁場遺跡（3）や祝谷大地ヶ田遺跡（4）などのように河岸段丘や丘陵地上に遺跡の分布が広がる。祝谷六丁場遺跡では分銅形土製品などが多数発見されたほか、石器製作の可能性も指摘されている。中期後半以降は集落の分布が扇状地低位部へ移行する。その代表が愛媛大学を中心とした文京遺跡で、弥生時代中期後葉～後期の竪穴式住居址200棟前後が発見され、大規模集落が営まれていることが明らかになり、その集落範囲は東西300ｍ、南北200ｍにも及んでいる。ここでは竪穴住居が集中する集住区のほか、その東の一段高いエリアに超大型建物・大型竪穴住居・方形壇などが配置される。

後期

文京遺跡の西方に位置する松山大学構内遺跡２次調査（13）・３次調査（14）や松山北高等学校遺跡（15）では後期末にかけての竪穴式住居址が検出されている。若草町遺跡２次調査（36）では円形の大溝内から弥生時代終末～古墳時代初頭の土器が大量に出土している。そのほか、永谷川の氾濫原に位置する祝谷大地ヶ田遺跡や祝谷アイリ遺跡（1）では後期前半の遺物が出土している。

一方、平野内での道後城北遺跡群の優位性を表す資料として、平形銅剣と鏡などが挙げられる。平形銅剣は、４か所で 22 振出土しており、そのうち祝谷六丁場遺跡の１振は埋納状態で検出した。次に鏡は、文京遺跡 10 次調査（19）出土舶載鏡片が瀬戸内地域における最古の流入例として知られるほか、若草町遺跡１次調査（35）で舶載の重圏日光鏡が出土している。そのほか、文京遺跡では鋳造鉄斧や滑石製指輪が出土している。

このように、近年の発掘調査によって弥生時代集落の構造やその変遷過程が次第に明らかになりつつある。

古墳時代

古墳時代の集落は、弥生時代に引き続き扇状地内において展開する。若草町遺跡は３次にわたる調査が行われており、1・3 次調査（37）で竪穴住居・土坑・溝などが多数検出されている。また、３次調査では古墳時代初頭の墓と考えられる円形周溝と方形周溝が検出されており、注目されている。そのほか集落は松山大学構内遺跡のほか持田町三丁目遺跡、祝谷アイリ遺跡において竪穴式住居址や土坑などが確認されている。

古墳は、平野背部の丘陵地に群をなして分布しており、祝谷古墳群、御幸寺山古墳群、常信寺古墳群、桜谷古墳群、石手・伊佐爾波古墳群などが知られている。そのほか平野部に位置する若草町遺跡２次調査においても、６～７世紀の古墳が６基発見されている。

古　代

これまで遺跡群内における古代の遺構検出例は少なく、不明な点が多い。岩崎遺跡では、「L」字状に折れ曲がる溝を検出し、畿内産土師器や土馬が出土している。そのほか、９世紀後半から 10 世紀前半の緑釉陶器や灰釉陶器などが数多く出土している。道後今市遺跡９次調査（24）では、包含層中から遺物が出土しているほか、道後樋又遺跡２次調査（12）では自然流路が確認されている。

また白鳳期の寺院址である湯之町廃寺（7）や内代廃寺（30）が古くから知られているが、詳細な発掘調査はされていない。しかしながら、関太郎氏によって、石田茂作氏が湯之町廃寺と推定した同一地点で複弁八葉蓮華文軒丸瓦などを採集されている。道後湯月町遺跡（26）では、平安時代から室町時代の池址を検出し、池址に伴う祭祀と思われる土器が大量に出土する地点を検出した。

大宝律令制定以後、愛媛県は伊豫国と称され、14 郡が設置されていた。このうち５郡が松山平野内にあり、それぞれ伊予・和気・久米・温泉・浮穴と呼ばれていた。本報告の３遺跡は温泉郡に属していたものと推定される。

中　世

湯築城跡（29）は 14 世紀に河野氏によって独立丘陵上に築城された平山城である。以後 250 年間

にわたって領国を支配した。この内部からは二重に巡らされた堀、土塁、礎石建物などが確認されている。道後今市遺跡３次調査（22）では備前甕を利用した甕棺墓が確認されているほか、同９次調査では水田址のほか、13～14世紀を主体とする掘立柱建物をも検出している。また同１次調査（21）・５次調査（23）では14～16世紀の溝や土坑・墓が検出されている。また道後町遺跡（31）では15世紀代の条里区画に沿った溝を検出しており、今後も注目される遺跡である。

[参考文献]
1. 岡田　敏彦　1985『道後今市遺跡』愛媛県教育委員会・財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター
2. 古代学協会四国支部　1988『松山道後城北の弥生遺跡をめぐって』（シンポジウム資料）
3. 西尾　幸則　1989「道後城北（ＲＮＢ）遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅱ』松山市教育委員会
4. 重松　佳久　1990「道後今市遺跡７次調査概要」『国庫補助事業概要』松山市教育委員会文化教育課
5. 宮崎　泰好　1991『祝谷六丁場遺跡』松山市教育委員会・松山市立埋蔵文化財センター
6. 梅木　謙一　1991『松山大学構内遺跡－第２次調査－』松山市教育委員会・松山市立埋蔵文化財センター
7. 梅木　謙一・宮内　慎一　1992「道後今市遺跡６次調査」『道後城北遺跡群』財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
8. 相原　浩二　1992「道後今市遺跡８次調査」『道後城北遺跡群』財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
9. 多田　　仁　1992「松山平野の石器文化」『祝谷アイリ遺跡』財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
10. 橋本　雄一・相原　秀仁　1994「道後今市遺跡９次調査」『道後城北遺跡群Ⅱ』財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
11. 多田　　仁・湖西　一成　1994『道後今市遺跡Ⅹ』財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター
12. 真鍋　昭文　1995『持田町三丁目遺跡』財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター
13. 宮内　慎一　1995『松山大学構内遺跡Ⅱ－第３次調査－』松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
14. 梅木　謙一　1998『松山大学構内遺跡Ⅲ－第４・５次調査－』松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
15. 愛媛大学埋蔵文化財調査室　1998『文京遺跡シンポジウム』
16. 西尾　幸則・政本　和人　1999「道後今市遺跡12次調査」『松山市埋蔵文化財調査年報11』松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
17. 宮内　慎一　1999『岩崎遺跡』松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
18. 梅木　謙一　2002『伊台墓部遺跡』松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
19. 真鍋　昭文　2002『土居窪遺跡２次・祝谷畑中遺跡・祝谷本村遺跡２次』財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター
20. 真鍋　昭文　2003『道後今市遺跡13次』財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター
21. 日本考古学協会　2006『日本考古学協会2006年度愛媛大会研究発表資料集』
22. 山之内志郎　2007『松山大学構内遺跡Ⅳ－第６次調査－』松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
23. 吉岡　和哉　2008「道後今市遺跡14次調査」『松山市埋蔵文化財調査年報20』松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
24. 重松　佳久　2009「道後今市遺跡７次調査」『松山市埋蔵文化財調査年報21』松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

第 2 章

祝谷畑中遺跡 2 次調査

第２章　祝谷畑中遺跡２次調査

1. 調査の経過

(1) 調査に至る経緯

2005（平成17）年10月８日、松山市祝谷二丁目263番６における宅地造成にあたって、埋蔵文化財の確認願いが松山市教育委員会文化財課（以下、文化財課）に提出された。祝谷二丁目263番６は、松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地『No.55・56・57北代・緑台・土居窪遺物包含地』内に所在する。

調査地周辺では、永谷川左岸域に祝谷アイリ遺跡、祝谷丸山遺跡、祝谷大地ケ田遺跡、祝谷本村遺跡、祝谷畑中遺跡、土居窪遺跡、永谷川右岸域には祝谷六丁場遺跡、祝谷西山遺跡など、これまでに数多くの発掘調査が行われており、主に弥生時代の集落跡が検出されている。特に北西約700ｍの祝谷六丁場遺跡では丘陵部から弥生時代後期の埋納された平形銅剣が出土し、南西約40ｍの祝谷畑中遺跡では弥生時代前期末から中期中葉頃の環濠などが検出されており、松山平野でも注目される重要な地域である。

これらのことから文化財課は、調査地に弥生時代～古代にかけての集落関連遺構が遺存する可能性があると判断し、埋蔵文化財の有無を確認するため2005（平成17）年11月２日に試掘調査（野外調査）を実施した。その結果、竪穴住居や土坑・柱穴などの遺構や、弥生土器などの遺物を検出し、調査地に弥生時代以降の遺跡が存在することを確認した。

試掘調査の結果を受けて遺跡の取り扱いについて協議したところ、国庫補助を受けて調査地内で確認された遺跡に対して記録保存を目的とした発掘調査（本格調査）を実施することとなった。調査では擁壁工事に伴い遺跡が破壊される部分のみの発掘調査を行った。

発掘調査では、弥生時代以降の当該地および周辺地域の集落構造解明を主目的とし、文化財課からの委託を受け、財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センターが主体となって2005（平成17）年11月11日に開始した。

(2) 調査の経緯

発掘調査は平成17年11月11日から同年11月18日まで屋外調査を実施した。以下、調査工程を略記する。

屋外調査：平成17年11月11日、重機による表土掘削を開始すると同時に、現場保全のため杭打ち・ロープ張りを行う。11月14日、壁面・床面の精査を開始する。水準点やグリッド杭の設置、全測図測量を行う。11月15日、遺構検出写真撮影を行い、遺物包含層上面の遺構掘り下げ、遺物包含層のトレンチ掘りを行う。11月16日、遺物包含層の掘り下げを行う。11月17日、地山上面の遺構掘り下げを行う。11月18日、遺構の掘り下げ・図面測量を終了し、遺構完掘写真撮影を行う。同時に発掘機材の撤出を行い、本日にて屋外調査を完了する。

(3) 調査組織

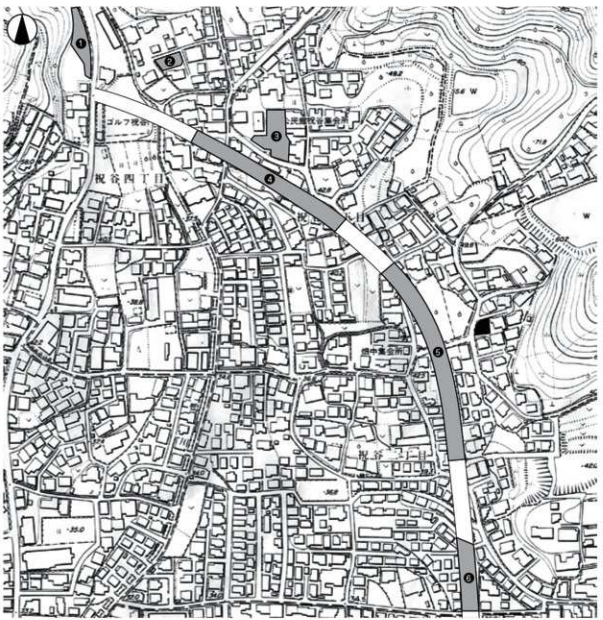
調 査 地：松山市祝谷二丁目 263 番 6

遺 跡 名：祝谷畑中遺跡２次調査

調査期間：屋外調査　2005（平成 17）年 11 月 11 日～同年 11 月 18 日

調査面積：210.11 ㎡のうち 61.4 ㎡

調査担当：埋蔵文化財センター調査員　河野史知、小笠原善治



第２図　調査地位置図

2. 層　位

(1) 基本層位（第３図）

祝谷地区の地形は、高縄山地に源を発した永谷川で東西に分けられ、両岸には丘陵地と小規模な河岸段丘で構成されている。調査地は、この河岸段丘上に位置し、現地表面の標高は約 47 mを測り、調査以前は宅地であった。

基本土層は、以下の５層である。第Ⅰ層から第Ⅴ層を検出した。第Ⅰ層は、近現代の造成土。第Ⅱ層は、砂質土の堆積層。第Ⅲ層は、土師器を含む包含層。第Ⅳ層は、土師器・瓦器を含む包含層。第Ⅴ層は地山土で最終的な遺構の検出面である。

第Ⅰ層　３層に分けられ、①層は褐色土（7.5YR4/3）と灰褐色土（7.5YR6/2）の混合層で、調査区南西部から北東部で層厚７～ 26 cmの堆積を測る。②層は灰黄褐色土（10YR5/2）で、調査区南側で層厚５～ 22 cmの堆積を測る。③層は黄橙色土（7.5YR7/8）で、調査区全域に層厚６～ 16 cmの堆積を測る造成土である。

第Ⅱ層　２層に分けられ、①層は浅黄色（2.5Y7/3）砂質土で、調査区南側に厚さ 18 ～ 29 cmの堆積を測る。②層は浅黄色（2.5Y7/4）砂質土で①層よりやや黄色を帯び、調査区西端に厚さ８～ 20 cmを測る堆積土である。

第Ⅲ層　３層に分けられ、①層は灰褐色（7.5YR6/2）砂質土で、全域に厚さ６～ 25 cmの堆積を測る。②層は明褐灰色（7.5YR7/1）砂質土で、調査区南端に厚さ 13 ～ 22 cmの堆積を測る。③層は②層に砂粒を多含し、南端に層厚 13 ～ 16 cmの堆積を測り、この層の上面においてＳＤ２を検出した。土師器の小片を包含する。

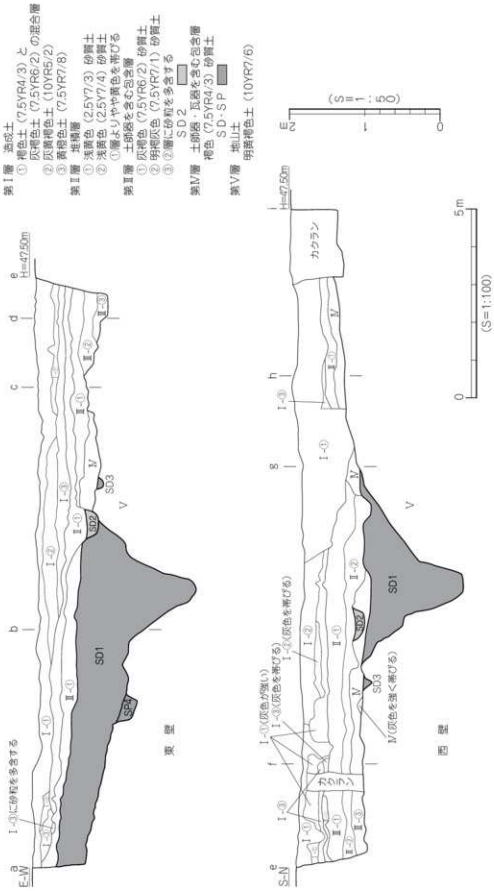
第Ⅳ層　褐色（7.5YR4/3）砂質土で、調査区の南・東端を除く全域に厚さ８～ 32 cmの堆積を測り、緩傾斜面の第Ⅴ層上に平行に堆積し、土師器・瓦器片を包含する。

第Ⅴ層　明黄褐色土（10YR7/6）は、地山土とよばれるもので、この層の上面において殆どの遺構を検出した。

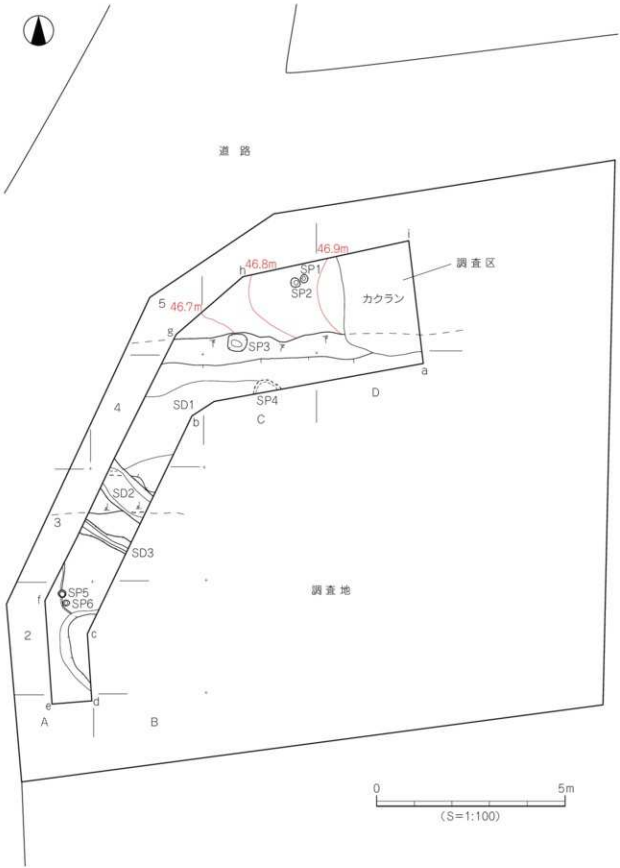
調査にあたり、調査区内を３m四方のグリッドに分けた。グリッドは南から北に向けて１・２・３、西から東に向けてＡ・Ｂ・Ｃとし、Ａ１・Ａ２・・・としたグリッド名を付けた。グリッドは、遺構の位置表示や遺物の取り上げ等に利用した。

(2) 検出遺構・遺物

調査で検出した遺構は、古代から中世にかけての溝３条、柱穴６基である。今回の調査では溝や柱穴等は、遺構ごとに通し番号（ＳＤ１・２・・・）を付けた。遺物は遺構や包含層から出土したもので、弥生土器・土師器・須恵器・瓦器・陶磁器・鉄製品・サヌカイト剥片などが少量出土する。


第Ⅰ層　造成土
① 褐色土（7.5YR4/3）と
灰褐色土（7.5YR6/2）の混合層
② 灰黄褐色土（10YR5/2）
③ 黄褐色土（7.5YR7/8）
第Ⅱ層　堆積層
① 浅黄色（2.5Y7/3）砂質土
② 浅黄色（2.5Y7/4）砂質土
①層よりやや黄色を帯びる
第Ⅲ層　土師器を含む包含層
① 灰褐色（7.5YR6/2）砂質土
② 明褐灰色（7.5YR7/1）砂質土
③ ②層に砂粒を多含する
SD2
第Ⅳ層　土師器・瓦器を含む包含層
褐色（7.5YR4/3）砂質土
SD・SP
第Ⅴ層　地山土
明黄褐色土（10YR7/6）
I-①に砂粒を多含する
H=47.50m
SD1
SD2
SD3
SP4
東壁
I-①(灰色が強い)
I-②(灰色を帯びる)
I-③(灰色を帯びる)
M(灰色を強く帯びる)
カクラン
西壁
(S=1:100)
(S=1:50)

第３図　土層図


道　路
46.8m
46.9m
46.7m
SP1
SP2
SP3
SP4
SP5
SP6
SD1
SD2
SD3
調査区
カクラン
調査地
A
B
C
D
0
5m
(S=1:100)

第4図　遺構配置図

3. 遺構と遺物

本調査では古代末から中世にかけての遺構や遺物を検出した。遺構は、溝３条、柱穴６基を検出した。

1）溝

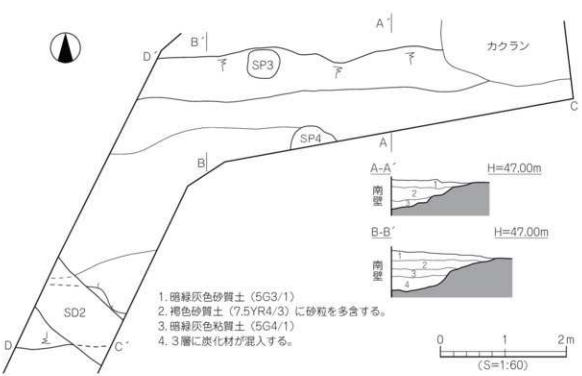
ＳＤ１（第５・６図、図版４・５）

調査区中央部のＡ～Ｄ・３～５区に位置し、ＳＤ２に切られ、東西端は調査区外に延びる。主軸はＮ-98° - Ｅとほぼ磁北と直角方向を指向する。規模は検出長 8.5 m、上場幅 4.62 ～ 4.8 m、深さ 48 ～ 155 cmを測る。断面形態はＶ字状を呈し、旧地形に沿うように東から西へ約 27 cmの比高差をもつ。埋土はほぼ旧地形に平行に堆積しており３層に分層できる。埋土上位の暗緑灰色砂質土から中位の褐色砂質土にかけては砂粒を多含し、下位は暗緑灰色粘質土となる。遺物は上位から下位にかけて土師器の椀・坏・鍋、瓦器の椀の小片、輪の羽口、鉄製品などや混入品の弥生土器や須恵器の小片が出土する。最下層の粘土層には５～ 10 ㎜大の炭化材の小片が混入する。

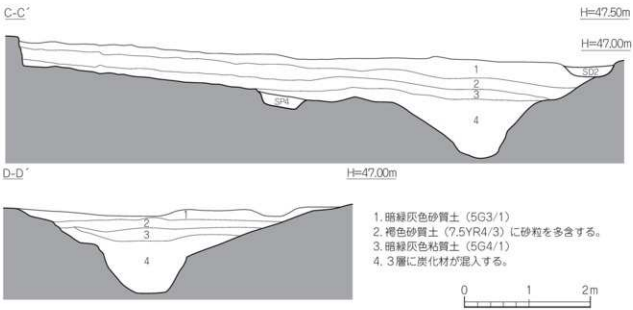
出土遺物（第７図、図版６）

１は弥生土器の壺で、外反する口縁部に端部は丸く納まる。2･3は須恵器の坏身で、2は受部端が凹み、3は平底の底部から内湾気味に立ち上がり口縁端部が丸く納まり、内外面に回転ナデ調整が施される。4～７は土師器の椀で、4･5は断面逆三角形状の高台が貼り付き、6･7は断面逆台形状の高台をもつ。8･9は土師器の坏で、9は底部に回転糸切り痕が残る。10・11は和泉型瓦器椀で、10は口縁部付近に稜をもつ。11は断面逆三角形状の高台が貼り付く。12は土鍋で緩やかに「く」字状の口縁部をもち端部は丸く納まる。13は窯壁の一部で、内面は黒色を呈しガラス質が大量に付着し、外面は橙色である。14は鉄製の石突で、円錐状に折り曲げられた中空で先端が尖る。長さ 4.35 cm、重さ 8.95 ｇを測る。

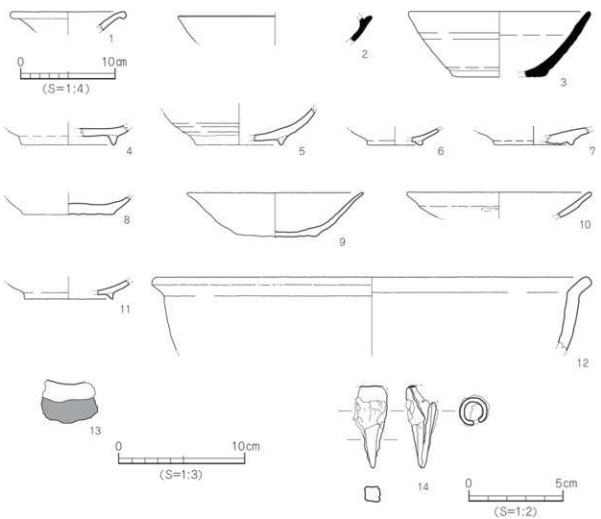
時期：出土した土師器や瓦器の特徴から、12 世紀後半とする。



第５図　ＳＤ１測量図（1）



第6図　ＳＤ１測量図（2）



第7図　ＳＤ１出土遺物実測図

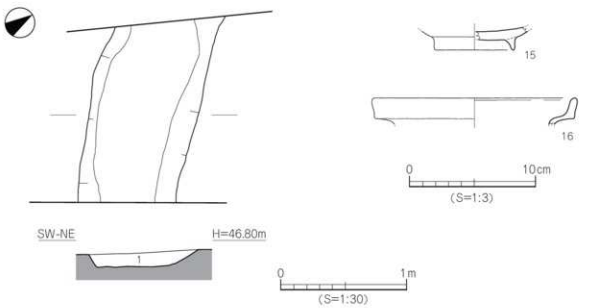
ＳＤ２（第８図）

調査区南西部のＢ・３～４区に位置し、ＳＤ１を切り、東西端は調査区外に延びる。主軸はN-47°-Eで南東から北西方向を指向する。規模は検出長1.4ｍ、上場幅0.78～0.86ｍ、深さ10～12㎝を測り、溝床は東から西へ３㎝の比高差をもつ。断面形態は逆台形状を呈する。埋土は浅黄色砂質土の単一層である。遺物は、溝床から浮いた状態で土師器椀・瓦器椀の小片が僅かに出土する。

出土遺物（第８図、図版６）

15は土師器の椀で、断面逆三角形状の高台が貼り付き内面にナデ調整、外面にナデ・横ナデ調整が施される。16は瓦器の鉢で、口縁部が屈曲し上方に拡張し、内外面に横ナデ調整が施される。

時期：出土した土師器の特徴から、13世紀代とする。



第８図　ＳＤ２測量図・出土遺物実測図

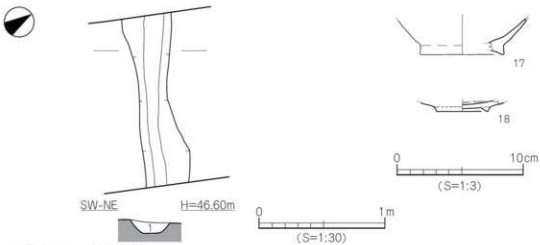
ＳＤ３（第９図）

調査区南西部のＡ～Ｂ・３区に位置し、東西端は調査区外に延びる。主軸はN-65°-Eを指向する。規模は検出長1.36ｍ、上場幅0.22～0.38ｍ、深さ８～10㎝を測り、溝床は東から西へ15㎝の比高差を測る。断面形態は逆台形状を呈する。埋土は褐色砂質土の単一層である。遺物は、溝床から浮いた状態で土師器椀・瓦器椀の小片が僅かに出土する。

出土遺物（第９図、図版６）

17は土師器の椀で、断面逆三角形状の高台をもつ。18は和泉型瓦器の椀で、断面逆三角形状の高台をもち内面にミガキ調整、外面にナデ・横ナデ調整が施される。

時期：出土した瓦器の特徴から、12世紀後半とする。



第９図　ＳＤ３測量図・出土遺物実測図

2）柱穴

ＳＰ１（第 10 図）

調査区北端のＣ・５区に位置する。平面形態は円形、断面形態は逆台形状を呈する。規模は直径 0.22 m、深さ 10 cmを測る。埋土は褐色砂質土の単一層である。出土遺物はない。

時期：出土遺物がなく、埋土がＳＤ３と同一なことから 12 世紀後半とする。

ＳＰ２（第 10 図）

調査区北端のＣ・５区に位置する。平面形態は楕円形、断面形態は逆台形状を呈し、基底面はほぼ平らである。規模は直径 0.25 m、深さ 10 cmを測る。埋土は褐色砂質土の単一層である。出土遺物はない。

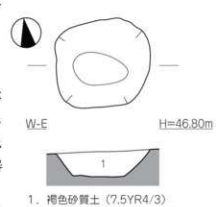
時期：出土遺物がなく、埋土がＳＤ３と同一なことから 12 世紀後半とする。

第 10 図　ＳＰ１・２測量図

ＳＰ３（第 11 図）

調査区北側のＣ・５区のＳＤ１の肩部に位置する。平面形態は楕円形、断面形態は逆台形状を呈し、基底面はほぼ平らである。規模は東西 0.50 m、南北 0.46 m、深さ 14 cmを測る。埋土は褐色砂質土の単一層である。遺物は、基底面から浮いた状態で土師器の小片が僅かに出土する。

時期：時期決定しうる遺物に乏しく、埋土がＳＤ３と同一なことから 12 世紀後半とする。

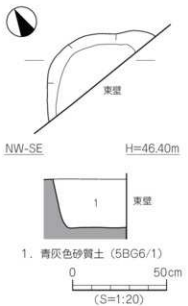


第 11 図　ＳＰ３測量図

ＳＰ４（第12図）

調査区北側のＣ・４区のＳＤ１の溝床付近に位置し、ＳＤ１に切られてた状態で検出する。南側は調査区外に延びるため全容は不明であるが、残存状況から平面形態は楕円形、断面形態は逆台形状を呈し、基底面は平らである。規模は東西0.72ｍ、南北0.26ｍ以上、深さ26㎝を測る。埋土は青灰色砂質土の単一層である。出土遺物はない。

時期：出土遺物がなく、ＳＤ１に切られることから12世紀後半以前としか判らない。



第12図　ＳＰ４測量図

ＳＰ５（第13図）

調査区南側のＡ・２区に位置する。平面形態は円形、断面形態は逆台形状を呈し、基底面は平らである。規模は直径0.2ｍ、深さ16㎝を測る。埋土は褐色砂質土の単一層である。遺物は、埋土上位から中位にかけて土師器の小片が僅かに出土する。

時期：時期決定しうる遺物に乏しく、埋土がＳＤ３と同一なことから12世紀後半とする。

ＳＰ６（第13図）

調査区南側のＡ・２区に位置する。平面形態は円形、断面形態は逆台形状を呈し、基底面は平らである。規模は直径0.18ｍ、深さ８㎝を測る。埋土は褐色砂質土の単一層である。遺物はない。

時期：出土遺物がなく、埋土がＳＤ３と同一なことから12世紀後半とする。

第13図　ＳＰ５・６測量図

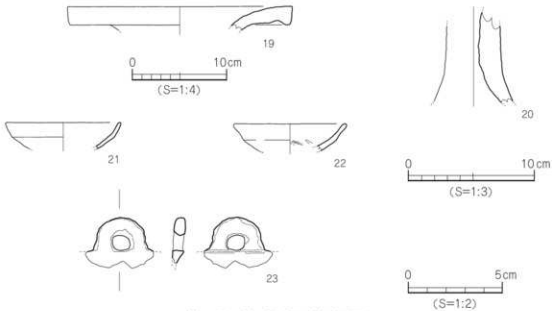
3）第Ⅳ層出土遺物

調査区の南端を除く全域に堆積しており、この層の上面においてＳＤ２、下面からＳＤ１･３、ＳＰ１･２･５･６を検出する。遺物は土師器の椀・坏・皿、瓦器の椀、陶磁器の碗、鉄製品の鍋の把手・滓などに混じり、弥生土器や古墳時代の土師器・須恵器の小片、サヌカイト剥片などが少量出土する。

出土遺物（第14図、図版６）

19は弥生土器の壺で口縁端部が平らな面をなし、下方にやや肥厚される。20は高坏の脚柱部で内面にシボリ痕が残る。21・22は和泉型瓦器椀で、口縁部やや下に稜をもち、22は内面にミガキ調整が施される。23は鉄鍋の把手部で穿孔がある。

時期：出土した遺物の特徴から、12世紀後半～13世紀にかけての堆積とする。



第14図　第Ⅳ層出土遺物実測図

4. 小　結

今回の調査では、古代～中世頃にかけての遺構や遺物を検出した。遺構は、溝・柱穴などである。

層位

本調査地は、丘陵尾根先端部付近に位置し、安定した第Ⅴ層の旧地山面が西側に傾斜しながら下がっている。その上に第Ⅳ層と第Ⅲ層の中世遺物を含む包含層の堆積がみられる。

第Ⅳ層やＳＤ１から弥生時代や古墳時代の土器などが出土していることから、調査地周辺に弥生時代から古墳時代にかけての集落が存在していたことが窺える。

古代

ＳＤ１は丘陵裾部の緩傾斜面を直線的に縦断する断面Ｖ字形の溝であり、形状から人為的に掘られた可能性がある。下層からは砂層や、溝床付近には粘土層が堆積しており、この部分は水の作用を受けていたことが判る。出土した遺物から、短期間に溝が埋没したと考えられる。西側約40ｍ地点の祝谷畑中遺跡では、自然流路などから古代末から中世にかけての遺物が出土しており、周辺にはこの頃の集落が展開していたことを示唆するものである。

ＳＤ３やＳＰ１・２・５・６などは、埋土からＳＤ１の上層が埋没する頃の集落関連遺構と考えられ、これらの遺構を検出したことからＳＤ１と係わりをもつ集落が周辺に存在していたことが窺える。

中世

旧地形に沿うようにＳＤ２を検出したことにより、古代末から中世にかけ継続的に人々の営みの痕跡を確認することが出来た。

今回の調査において、古代末から中世頃の集落を構成する遺構や遺物などを検出したことにより、同じ尾根上の標高がやや下がる畑中遺跡に広がる当時の集落構造を解明する貴重な資料が得られた。

【参考文献】

宮内　慎一　1992　「祝谷本村遺跡」『道後城北遺跡群：文京４次・道後今市６次・８次・道後樋又２次・祝谷本村』
松山市教育委員会・（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

梅木　謙一　1994　「祝谷大地ヶ田遺跡」『道後城北遺跡群Ⅱ：道後今市９次・道後鷺谷・祝谷大地ヶ田』
松山市教育委員会・（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

真鍋　昭文　2002　「土居窪遺跡２次・祝谷畑中遺跡・祝谷本村遺跡２次」（財）愛媛県埋蔵文化財調査センター

平岡　孝司　2002　「祝谷西山遺跡」（財）愛媛県埋蔵文化財調査センター

遺構・遺物一覧　－凡例－

(1) 以下の表は遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。

(2) 遺物観察表の各記載について。

法　量　欄　（　）：復元推定値

形態・施文欄　土器の各部位名称を略記。

例）底→底部

胎土・焼成欄　胎土欄では混和剤を略記した。

例）石→石英、長→長石、密→精製土、金→金雲母、砂→砂粒、
細→細粒（0.9 ㎜以下）

（　）内の数値は混和剤粒子の大きさを示す。（単位：㎜）

焼成の略記について。◎→良好、○→良、△→不良。

表３　溝一覧

溝(SD)	地　区	断面形	規　模　（m） 長さ（長径）×　幅（短径）×　深さ	方　向	埋　土	出土遺物	時　期	備　考
1	A～D・3～5	V字状	8.5×4.62～4.8×0.48～1.55	東西	暗緑灰色砂質土 褐色砂質土 暗緑灰色粘質土	弥生・須恵 土師・瓦器 鉄	12Ｃ後半	ＳＤ２に切られる。
2	B・3～4	逆台形状	1.4×0.78～0.86×0.1～0.12	南東～北西	浅黄色砂質土	土師・瓦器	13Ｃ	ＳＤ１を切り、東西端は調査区外に延びる。
3	A～B・3	逆台形状	1.36×0.22～0.38×0.08～0.1	東～西	褐色砂質土	土師・瓦器	12Ｃ後半	東西端は調査区外に延びる。

表４　ＳＤ１出土遺物観察表　土製品　(1)

番号	器種	法量（cm）	形　態・施　文	調　整 外　面	調　整 内　面	色調（外面） （内面）	胎　土 焼　成	備考	図版
1	壺	口径（11.9） 残高　2.0	外反する口縁部に端部は丸く納まる。	マメツ	ナデ マメツ	灰白色 にぶい黄橙色	石（1～3） 長（1～2） ○		
2	坏身	受部径（15.4） 残高　2.05	受部端が凹む。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	細粒 ◎		
3	坏身	口径（14.2） 器高　5.2 底径（7.3）	平底の底部から内湾気味に立ち上がり、口縁端部は丸く納まる。	回転ナデ ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	密 ◎		
4	椀	底径　（7.2） 残高　1.5	底部に断面逆三角形状の高台が貼り付く。	ナデ マメツ	マメツ	褐灰色 褐灰色	細粒 ○		
5	椀	底径　（6.7） 残高　2.9	底部に断面逆三角形状の高台が貼り付く。	ヨコナデ ナデ	ナデ	灰白色 淡黄橙色	密 ○		6

ＳＤ１出土遺物観察表　土製品　(2)

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
6	椀	底径 (4.1) 残高 1.3	底部に断面逆台形状の高台をもつ。	マメツ	マメツ	淡黄橙色・灰白色 橙色	石 (1) 細粒 ○		
7	椀	底径 (6.0) 残高 1.35	底部に断面逆台形状の高台をもつ。	回転ナデ マメツ	マメツ	灰白色 灰白色	密 ○		6
8	坏	底径 (7.3) 残高 1.4	平底の底部。	マメツ	マメツ	にぶい橙色 灰黄褐色	石 (2)・長 (1) 金・砂 ○		
9	坏	口径 (13.9) 器高 3.5 底径 6.45	平底の底部から内湾気味に立ち上がり口縁端部はやや外反する。	マメツ ㉖回転糸切り	回転ナデ マメツ	灰白色・にぶい橙色 にぶい黄橙色	細粒 ○		6
10	椀	口径 (14.4) 残高 2.0	口縁部付近に稜をもつ。 （和泉型瓦器）	回転ナデ マメツ 指頭痕	回転ナデ マメツ	灰色・灰白色 灰色・灰白色	密 ○		6
11	椀	底径 (6.9) 残高 1.5	底部に断面逆三角形状の高台が貼り付く。（和泉型瓦器）	ナデ マメツ	ナデ	灰色 灰色	密 ○		6
12	土鍋	口径 (34.0) 残高 5.85	緩やかに「く」字状の口縁部をもち、端部は丸く納まる。胴部外面に煤けあり。	ナデ マメツ	マメツ	にぶい橙色・灰黄褐色 橙色・灰黄褐色	石 (1 ～ 3) 長 (1 ～ 2) ○	煤	6
13	窯壁	内径 (8.8)	窯壁の一部で、内面にガラス質が付着する。	－	ナデ	暗灰色 にぶい橙色	石 (1 ～ 5) 長 (1 ～ 7) ○		6

表５　ＳＤ１出土遺物観察表　鉄製品

番号	器種	残存	法量 長さ（cm）	法量 幅（cm）	法量 厚さ（cm）	法量 重さ（g）	備考	図版
14	石突	鞘口約 1/4 ～鞘尾完存	4.35	－	－	8.95		6

表６　ＳＤ２出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
15	椀	底径 (6.2) 残高 1.8	断面逆三角形状の高台が貼り付く。	ヨコナデ ナデ	ナデ	灰白色 灰白色	密 ○		6
16	鉢	口径 (16.0) 残高 2.1	口縁部が屈曲し上方に拡張する。 （瓦器）	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ	黒褐色 オリーブ黒色	長 (1) 細粒 ○		6

表７　ＳＤ３出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
17	椀	底径 (6.4) 残高 2.85	断面逆三角形状の高台をもつ。	マメツ	マメツ	淡赤橙色 淡赤橙色・橙色	長 (1) 金 ○		6
18	椀	口径 (4.0) 残高 0.85	断面逆三角形状の高台をもつ。 （和泉型瓦器）	ヨコナデ ナデ	ナデ ミガキ	灰色 灰色	密 ○		6

表８　第Ⅳ層出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
19	壺	口径 (23.7) 残高　2.5	大きく外反する口縁部に端部は平らな面をなし、下方に肥厚する。	マメツ	マメツ	浅橙色・にぶい黄橙色 橙色・灰白色	石（1～5） 長（1～2） ○		
20	高坏	残高　7.2	外反する脚柱部。	マメツ	マメツ シボリ痕	にぶい黄橙色・ にぶい赤褐色 明褐色・明灰色	石・長（1～3） ○		
21	椀	口径　(9.0) 残高　2.1	口縁部やや下に稜をもつ。 （和泉型瓦器）	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ	灰色 灰色	細粒 ○		6
22	椀	口径　(8.8) 残高　2.15	口縁部やや下に稜をもつ。 （和泉型瓦器）	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ナデ ミガキ	灰色 灰色	細粒 ○		6

表９　第Ⅳ層出土遺物観察表　鉄製品

番号	器種	残存	法量 長さ（cm）	法量 幅（cm）	法量 厚さ（cm）	法量 重さ（g）	備考	図版
23	鉄鏃	把手部完存	2.7	3.6	0.7	7.03		6

第3章

道後今市遺跡7次調査

第３章　道後今市遺跡７次調査

１．調査の経過

(1) 調査に至る経緯（第 15 図）

1990（平成2）年1月、松山市道後一万775番1、775番7及び775番8における一般専用住宅建設に伴う埋蔵文化財の確認願が、松山市教育委員会文化教育課（以下、文化教育課）に提出された。確認願が提出された申請地は、松山市が指定する埋蔵文化財包蔵地の『No.68今市遺物包含地』内にあたる。

同包含地内では、これまでに財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センターにより道後今市遺跡として5度の発掘調査（1～5次調査）〔岡田1985〕が実施され、弥生時代から中世に至る集落関連遺構や遺物が多数確認されている。申請地北側に隣接する地点では平成元年度に松山市埋蔵文化財センターによって道後今市遺跡6次調査〔宮内1992〕が実施され、古墳時代中期の竪穴住居や弥生時代から古代までの遺物が検出されている。なお、同地は1909（明治42）年に平形銅剣10口が出土した地点として古くから知られている〔和田1909〕。また、申請地北東部では平成2年度に道後今市遺跡8次調査〔相原1992〕が実施され、弥生時代前期から古墳時代まで存続した自然流路が確認されている。

これらのことから、住宅建設により消失する遺跡に対して記録保存のための発掘調査を実施することになった。調査は国からの補助金を受け、国庫補助事業として実施した。なお、調査は平形銅剣に関する資料存在の有無と、今市遺物包含地内に存在する弥生時代から中世までの集落範囲や様相解明を目的とし、文化教育課が主体となり、1990（平成2）年2月に開始した。

第 15 図　調査地位置図（S = 1 : 3,000）

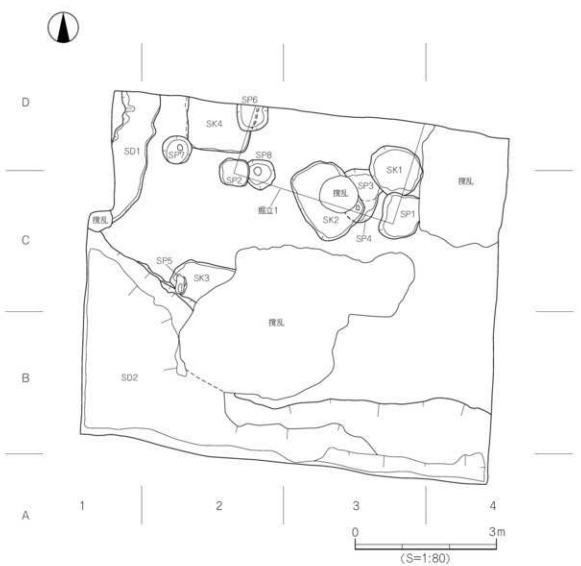
(2) 調査組織

所 在 地 ：松山市道後一万775番1、775番7及び775番8
調査期間：1990（平成2）年2月7日～同年3月31日
調査面積：379.53㎡
調査担当：松山市教育委員会　重松　佳久

2. 層　位（第17図、図版8）

(1) 基本層位

調査地は石手川扇状地と大川・丸山川による扇状地とが接する扇状地性氾濫源の、標高約30ｍに立地する。調査で確認した土層は、以下の8種類（Ⅰ～Ⅷ層）である。なお、調査地内には近現代の造成等に伴う撹乱跡があり、遺構面の残存は調査地の約2/3であった。



第16図　遺構配置図

Ⅰ層－真砂土で、地表下 40 ～ 70cm まで開発が行われている。

Ⅱ層－近現代の農耕に伴う耕土で、土色・土質の違いにより５種類に分層される。

Ⅱ①層：灰色（7.5Y6/1）を呈する粘質土で調査区全域にみられ、層厚３～ 20cm を測る。

Ⅱ②層：灰色（10Y6/1）を呈する砂質土に、にぶい褐色（7.5Y3/4）シルトが混入する土層で調査区南西部にみられ、層厚５～ 20cm を測る。

Ⅱ③層：灰色（10Y5/1）を呈する砂質土で調査区南側にみられ、層厚５～ 30cm を測る。

Ⅱ④層：オリーブ灰色（10Y6/2）の粘質土で調査区北半部にみられ、層厚５～ 40cm を測る。

Ⅱ⑤層：オリーブ灰色（10Y6/2）粘質土に黒褐色（5YR2/2）シルトがブロック状に混入するもので調査区北東部にみられ、層厚 10cm を測る。

Ⅲ層－赤褐色（5YR4/8）粘質土で調査区南西部にて部分的にみられ、層厚 15cm を測る。

Ⅳ層－黒褐色（10YR3/2）を呈するシルト層で調査区南東部にみられ、層厚 10 ～ 20cm を測る。本層中からは、古墳時代から古代の土師器片や須恵器片が出土した。

Ⅴ層－灰黄褐色（10YR5/2）砂質土で調査区南側にて部分的にみられ、層厚５～ 10cm を測る。

Ⅵ層－黄褐色（10YR5/6）粘質土で調査区南半部にみられ、層厚 10 ～ 40cm を測る。本層は、溝ＳＤ２上面を覆う。

Ⅶ層－黒褐色（5YR2/1）を呈するシルト層で調査区南西部を除く地域にみられ、層厚 10 ～ 40cm を測る。調査壁の土層観察により、検出した遺構の上面にはⅦ層が堆積している。また、本層上面から掘削された柱穴〔埋土：A〕を確認した。本層中からは、弥生土器や土師器の破片が数多く出土した。

Ⅷ層－微弱な土質、土色の違いにより二種類に分層される。

Ⅷ①層：にぶい黄橙色（10YR6/3）を呈するシルト層で、最大層厚 50cm を測る。本層上面は、調査における最終遺構検出面である。

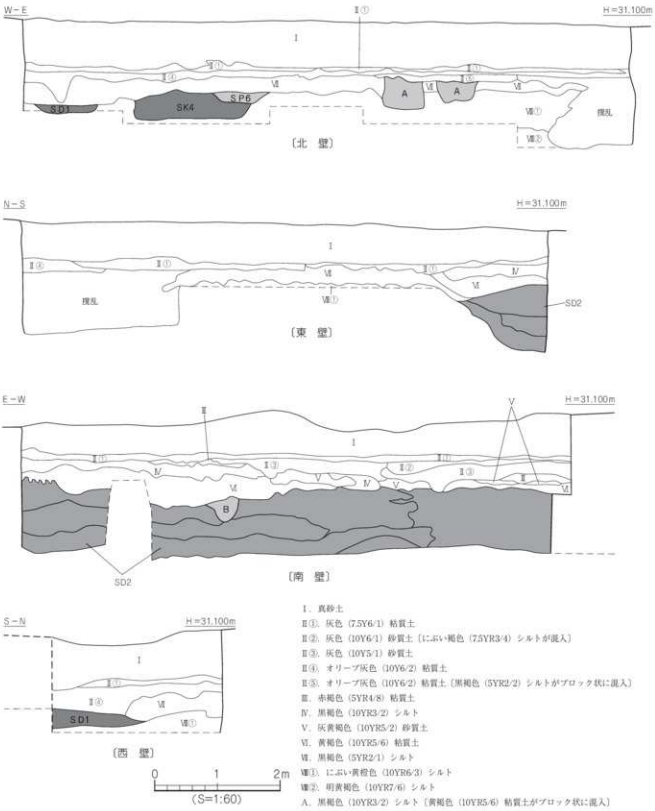
Ⅷ②層：調査区北壁に設定したトレンチにより確認した土層で、明黄褐色（10YR7/6）を呈するシルト層である。

検出した遺構や出土遺物より、Ⅶ層は古墳時代、Ⅳ層は古代までに堆積した土層と考えられる。なお、調査にあたり調査区内を３m四方のグリッドに分けた。グリッドは南から北へ向けてＡ・Ｂ・Ｃ・Ｄ、西から東へ向けて１・２・３・４とし、Ａ１・Ａ２・・・Ｄ４といったグリッド名を付した。グリッドは、遺物の取り上げや遺構の位置表示に利用した。

（２）検出遺構・遺物（第 16 図、図版 7）

調査では掘立柱建物１棟、溝２条、土坑４基、柱穴８基を検出した。遺物は遺構や包含層、撹乱及び重機掘削時に出土したものであり、弥生土器（前期～後期）、土師器（古墳～中世）、須恵器（古墳～古代）、陶磁器（中世）、鉄器である。なお、遺物の出土量は遺物収納用箱（44 × 60 × 14cm）６箱分である。

なお、本編で掲載している基本土層や遺構埋土は、農林水産省農林水産技術会議事務局 監修の『新版 標準土色帖』（1998）に準拠している。



Ⅰ．真砂土
Ⅱ①．灰色（7.5Y6/1）粘質土
Ⅱ②．灰色（10Y6/1）砂質土〔にぶい褐色（7.5YR3/4）シルトが混入〕
Ⅱ③．灰色（10Y5/1）砂質土
Ⅱ④．オリーブ灰色（10Y6/2）粘質土
Ⅱ⑤．オリーブ灰色（10Y6/2）粘質土〔黒褐色（5YR2/2）シルトがブロック状に混入〕
Ⅲ．赤褐色（5YR4/8）粘質土
Ⅳ．黒褐色（10YR3/2）シルト
Ⅴ．灰黄褐色（10YR5/2）砂質土
Ⅵ．黄褐色（10YR5/6）粘質土
Ⅶ．黒褐色（5YR2/1）シルト
Ⅷ①．にぶい黄橙色（10YR6/3）シルト
Ⅷ②．明黄褐色（10YR7/6）シルト
Ａ．黒褐色（10YR3/2）シルト〔黄褐色（10YR5/6）粘質土がブロック状に混入〕
Ｂ．褐灰色（10YR5/1）シルト

第17図　調査区土層図

3. 遺構と遺物

調査では掘立柱建物１棟、溝２条、土坑４基、柱穴８基を検出した。すべて、第Ⅷ①層上面での検出である。

(1) 掘立柱建物

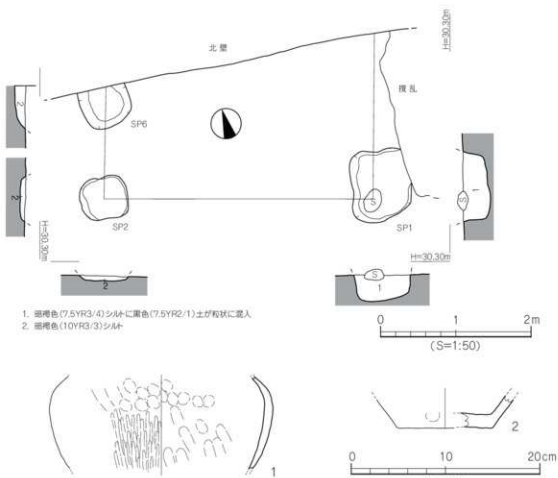
掘立１（第 18 図）

調査区北側Ｃ２～Ｄ３区で検出した１×１間以上の建物で、東西長 3.54 m、南北検出長 2.20 mを測る。柱穴ＳＰ１は土坑ＳＫ１を、柱穴ＳＰ６は土坑ＳＫ４を切っている。調査区北壁の土層観察により、ＳＰ６上面は第Ⅶ層が覆う。各柱穴の平面形態は円形または楕円形を呈し、規模は径 0.54 ～ 1.00 m、深さは検出面下６～ 35cm を測る。柱穴掘り方埋土は暗褐色シルトを基調とし、ＳＰ１の埋土中には黒色土が粒状に混入する。ＳＰ１埋土上位からは径 22 × 30cm、厚さ 15cm の扁平な石が出土した。なお、各柱穴から柱痕は検出されなかった。遺物は、弥生土器片が少量出土した。

出土遺物（第 18 図）

１はＳＰ６、２はＳＰ２出土品である。１は壺形土器の肩胴部片で、胴部外面にタテ方向のヘラミガキを施す。２は壺形土器の底部片で、平底である。

時期：時期特定は難しいが建物上面を第Ⅶ層が覆うことから、概ね古墳時代以前の建物とする。



第 18 図　掘立１測量図・出土遺物実測図

(2) 溝

ＳＤ１（第 19 図、図版 9）

調査区北西部Ｃ１～Ｄ２区で検出した南北方向の溝で溝南端は撹乱に削平され、北側は調査区外に続く。規模は幅 0.70 ～ 0.90 m、検出長 2.80 m、深さは検出面下 15cm を測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は黒褐色砂質土単層である。溝基底面は平坦であり、溝上面は第Ⅶ層が覆う。遺物は埋土中より、弥生土器片や土師器片、須恵器片が数点出土した。図化しうる遺物を２点掲載した。

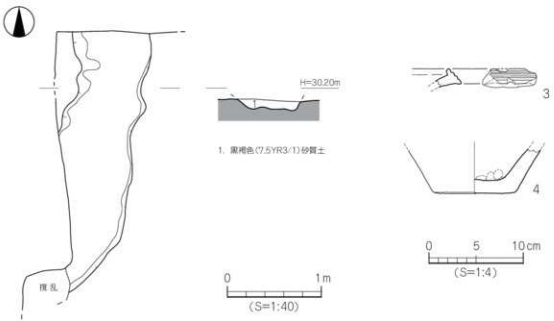
出土遺物（第 19 図）

3 は壺形土器の口縁部小片で、口縁端面に凹線文３条を施す。4 は壺形土器の底部で、平底である。

時期：出土遺物が僅少で時期特定は困難であるが第Ⅶ層が溝を覆うことから、概ね古墳時代以前とする。

ＳＤ２（第 20・21 図、図版９～ 11）

調査区南半部Ａ４～Ｃ１区で検出した「Ｌ」字状に折れ曲がる溝で、溝中央部の北側壁体は撹乱に削平され、溝北西部は土坑ＳＫ３を切っている。規模は南北検出長 1.53 ～ 3.70 m、深さは最深部で検出面下 95cm を測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は 13 種類（1 ～ 13 層）に分層される。埋土の状況をみると、溝東半部には砂や礫を含む土壌（4 ～ 6 層）が堆積しているのに対して、溝西半部では北西－南東方向に向けてシルト質の土壌が堆積している。溝上面には第Ⅳ層から第Ⅶ層が部分的に堆積しており、特に溝西半部では溝直上付近に堆積する第Ⅶ層中から、弥生時代末から古墳時代初頭に時期比定される土器が数点出土している。なお、南壁の土層観察では溝上面より柱穴（埋土:B）が掘削されている。



第 19 図　ＳＤ１測量図・出土遺物実測図

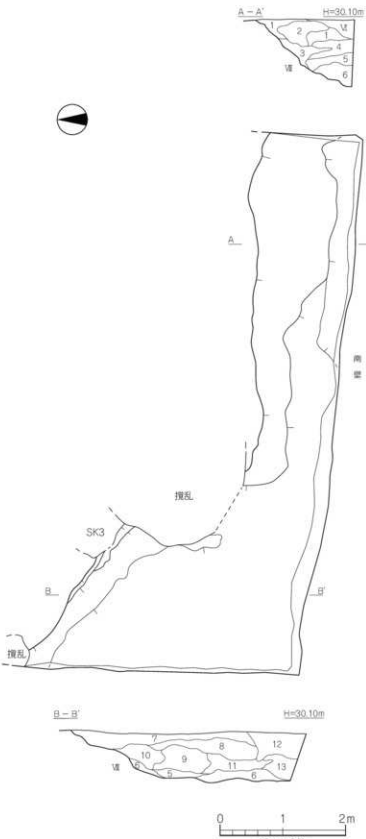
発掘調査時は溝埋土を上層と下層に分け、掘り下げと遺物の取り上げを行った。なお、遺物は平面測量図を作成し、個別に番号を付けて取り上げた。下層からは弥生時代前期のほか、中期後半に時期比定される土器が比較的まとまって出土した。一方、上層からは弥生時代中期後半期の土器のほかに弥生時代末に時期比定される土器片が出土した。整理作業時に取り上げた遺物を検証すると、溝西半部には弥生時代末に時期比定される土器類が比較的数多く分布しており、中期後半期の土器類は溝全体から出土していることが判明した。

出土遺物（第22・23図、図版15）

5～25は溝下層出土品、26～29は上層出土品である。5～17は甕形土器。5は「く」の字状口縁で、口縁端部は「コ」字状に仕上げる。6は口縁下に凸帯を貼付け、凸帯上に押圧を施す。5・6は弥生時代中期後半。7は貼付口縁で、胴部外面に櫛描き沈線文6条以上を施す。弥生時代前期末。8・9は胴部片で、8の胴部外面にはハケメ調整後、ナナメ方向のタタキ調整を施す。弥生時代末。10～17は底部で、10・11は厚みのある上げ底となる。10の胴部及び底部外面には、ヘラ状工具による刻目を施す。11は高台状の底部、12はくびれをもつ上げ底の底部である。13～15はわずかに上げ底、16・17は平底である。14の胴部外面には、タテ方向の丁寧なヘラミガキを施す。10～14は弥生時代中期後半、15～17は弥生時代末。18～23は壺形土器の底部。18・19は突出部をもつ底部片で、18はわずかに上げ底を呈し、胴部外面にヘラミガキを施す。19～23は平底で、21の外面にはタテないしヨコ方向のヘラミガキ、23はタテ方向のヘラミガキを施す。18～20は弥生時代後期後半、21～23は弥生時代中期後半。24・25は高坏形土器。24は脚部の完存品で、柱部にはヘラ描き沈線文10条、沈線文下に未貫通の矢羽根状透かし12ケ、脚裾部には凹線文3条を施す。25は破片で、柱部にはヘラ描き沈線文7条と未完通の矢羽根状透かし、柱裾部には凹線文3条を施す。24・25は弥生時代中期後半。

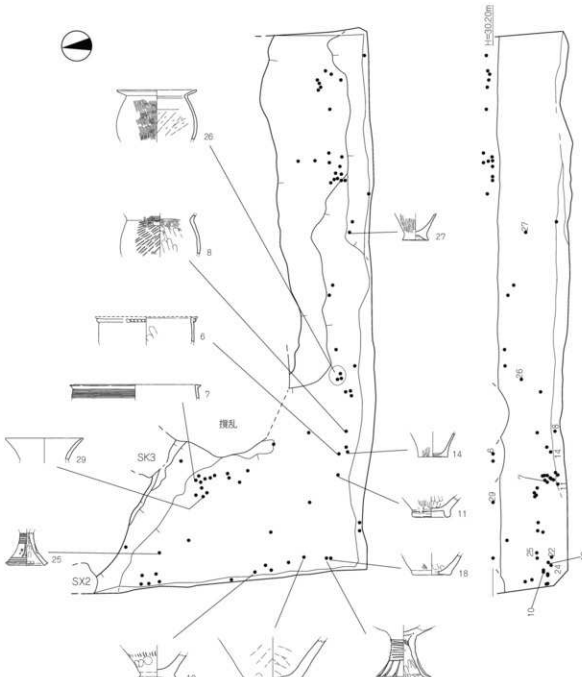
26・27は甕形土器。26の口縁部は「く」の字状を呈し、頸部内面に明瞭な稜をもつ。胴部外面にはタテ方向の粗いハケメ調整、内面にはナナメ方向のヘラケズリを施す。27はくびれをもつ上げ底で、胴部外面にはタテ方向のヘラミガキを施す。28・29は壺形土器の口縁部片。広口壺で、28の口縁端部は下外方に垂下する。29の口縁端部は尖り気味に丸く仕上げる。26・29は弥生時代末、27・28は弥生時代中期後半。

時期：溝内からは、弥生時代中期後半から末に時期比定される土器が混在して出土した。溝上面を覆う第Ⅶ層中からは古墳時代初頭に時期比定される土器が出土していることから、溝の掘削時期は弥生時代中期後半期、最終埋没時期は古墳時代初頭とする。

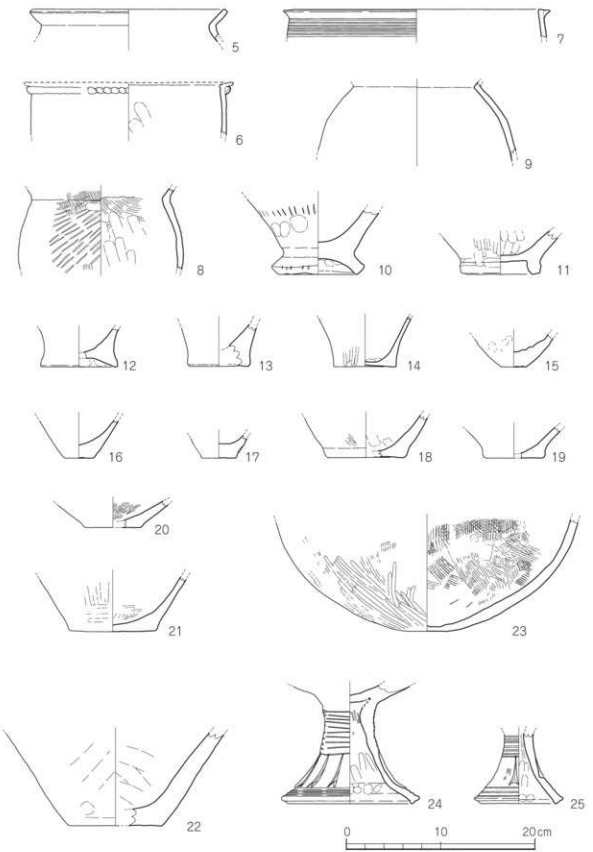


1. 灰色（5Y5/1）シルト
2. オリーブ灰色（2.5GY5/1）砂質シルト
3. 灰白色（2.5Y7/1）シルト
4. 緑灰色（10GY5/1）砂質シルト［小礫含む］
5. 灰白色（5GY8/1）シルト
6. オリーブ灰色（2.5GY6/1）粘質シルト［小礫含む］
7. 褐灰色（10YR5/1）シルト
8. 灰黄褐色（10YR5/2）シルト
9. 褐灰色（10YR5/1）砂質シルト
10. 黄灰色（2.5Y6/1）砂質シルト
11. 暗灰黄色（2.5Y5/2）シルト［褐灰色（10YR5/1）シルトがブロック状に混入］
12. 浅黄色（2.5Y7/3）シルト
13. 灰黄色（2.5Y7/2）シルト［小礫含む］

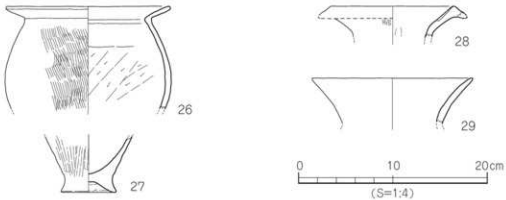
第20図　ＳＤ２測量図



第 21 図　ＳＤ２遺物出土状況図



第22図　ＳＤ２下層出土遺物実測図



第23図　ＳＤ２上層出土遺物実測図

（3）土　坑

ＳＫ１（第24図、図版12）

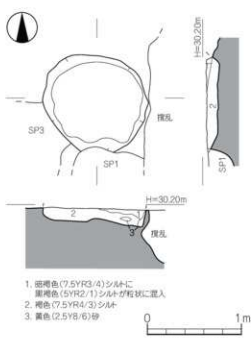
調査区北東部Ｃ・Ｄ３区に位置し、土坑南側は掘立１柱穴（ＳＰ１）に切られ、南西部は柱穴ＳＰ３を切っている。平面形態は円形を呈し、規模は径1.05～1.15m、深さは検出面下20cmを測る。断面形態は筒状を呈するが、土坑北側壁体は逆台形状となる。埋土は二種類あり、土坑上位には部分的に暗褐色シルト（黒褐色シルトが粒状に混入）〔1層〕がみられるが、埋土の大半は褐色シルトを基調とし、黄色砂がブロック状に少量混入するものである。土坑基底面には凹凸があり、わずかに北西から南東に向けて傾斜をなす。なお、土坑内からは遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが掘立１に先行することから、概ね古墳時代以前の遺構とする。

ＳＫ２（第25図、図版12）

調査区中央部北寄りＣ２～Ｄ３区に位置し、土坑東側は撹乱に削平され、２基の柱穴（ＳＰ3･4）を切っている。平面形態は楕円形を呈し、規模は長径1.66m、短径1.20m、深さは検出面下20cmを測る。断面形態は逆台形状を呈するが、土坑西側壁体は筒状となる。埋土は二種類あり、上層は黒色シルト〔1層〕、下層は黒色シルトに黒褐色シルトがブロック状に混入するもの〔2層〕である。土坑基底面はほぼ平坦である。なお、土坑内からは遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが第Ⅶ層が土坑上面を覆うことから、概ね古墳時代以前の遺構とする。

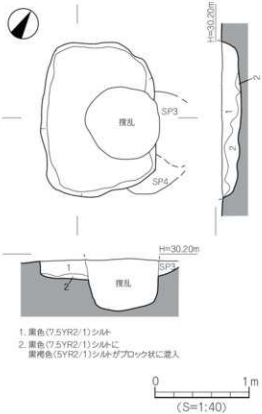


第24図　ＳＫ１測量図

ＳＫ３（第 26 図、図版 13）

調査区中央部西寄りＣ２区に位置し、土坑東側は撹乱に削平され、土坑南側は溝ＳＤ２に切られている。平面形態は楕円形を呈するものと考えられ、規模は東西検出長 1.32 m、南北検出長 1.15 m、深さは検出面下 15cm を測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は三種類に分層される。埋土上位には部分的に暗褐色シルト（黄色シルトが粒状に混入）〔１層〕がみられるが、埋土の大半は暗褐色シルトに黄色シルトがブロック状に混入するもの〔２層〕である。土坑基底面は平坦であり、基底面にて柱穴（ＳＰ５）を検出した。ＳＰ５は長径 0.45 m、短径 0.26 m、深さ 13cm を測る。柱穴埋土は、土坑埋土２層と同様の暗褐色シルトである。なお、土坑及びＳＰ５からは、遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが、第Ⅶ層が土坑上面を覆うことから、概ね古墳時代以前の遺構とする。



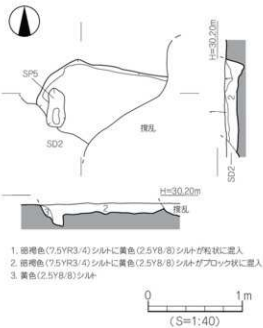
第 25 図　ＳＫ２測量図

ＳＫ４（第 27 図、図版 13・14）

調査区北壁中央部西寄りＤ２区に位置し、土坑東側は掘立１柱穴（ＳＰ６）、土坑南西隅は柱穴ＳＰ７に切られ、北側は調査区外に続く。平面形態は方形状を呈するものと考えられ、規模は東西長 1.35 m、南北検出長 1.10 m、深さは検出面下 30cm を測る。断面形態は筒状を呈するが、土坑西側壁体は袋状となる。埋土は暗褐色シルトを基調とし、黒色シルトや灰色シルト、黄色シルトが粒状に混入するものである。土坑基底面は平坦である。遺物は基底面付近や埋土下位より、弥生時代中期後半に時期比定される土器片が散在して出土した。断面形態や遺物の出土状況から、ＳＫ４は貯蔵穴の可能性が高い土坑と考えられる。

出土遺物（第 27 図、図版 16）

30 は推定口径 31.4cm を測る大型の甕形土器で、口縁端面に刻目、頸部には凸帯を貼付け、凸帯上に布目状の押圧を施す。31 は小片で、口縁端部



第 26 図　ＳＫ３測量図

は「コ」字状に仕上げる。32は底部の完形品で平底を呈し、内外面に粗いハケメ調整を施す。

時期：出土した弥生土器の特徴より、ＳＫ４は弥生時代中期後半の遺構とする。

(4) 柱　穴

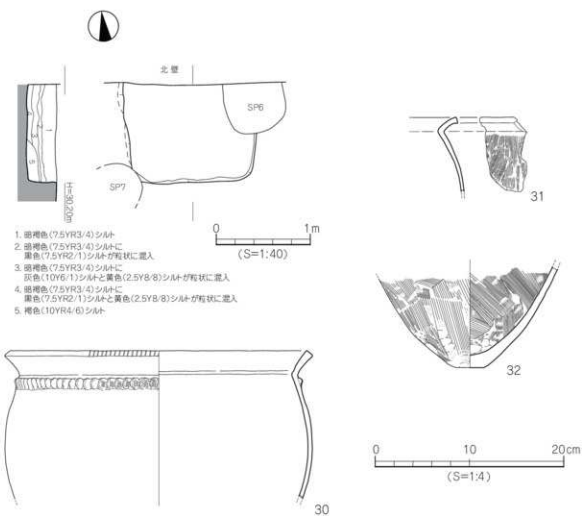
調査では、８基の柱穴（ＳＰ１～８）を確認した。なお、調査壁の土層観察により、これら８基以外に３基の柱穴〔埋土：A・B〕を確認した。検出した８基の柱穴は掘り方埋土をみると、以下の三種類に分類される。

１類：暗褐色シルト …… ＳＰ２・６

２類：暗褐色シルト（黒色シルト混入）…… ＳＰ１

３類：暗褐色シルト（黄色シルト混入）…… ＳＰ３・４・５・７・８

なお、調査壁面で確認した３基の柱穴のうち、埋土Ａの柱穴〔黒褐色シルトに黄褐色粘質土がブロック状に混入〕２基は第Ⅶ層上面から掘削され、埋土Ｂの柱穴〔褐灰色シルト〕は溝ＳＤ２上面から掘削されており第Ⅵ層が柱穴上面を覆う。各柱穴の詳細は、表13に記す。



第27図　ＳＫ４測量図・出土遺物実測図

（５）包含層・グリッド・撹乱・トレンチ出土遺物

調査では包含層である第Ⅳ層から第Ⅶ層掘り下げ時に遺物が出土したが、その中には出土層位が認定できない遺物があり、それらは「グリッド出土遺物」として取り扱い、撹乱内や調査区内に設定したトレンチから出土した遺物は「撹乱・トレンチ出土遺物」として実測図を掲載している。

出土遺物（第 28 ～ 32 図、図版 16）

1）包含層出土遺物

33 ～ 38 は第Ⅳ層、39 ～ 41 は第Ⅶ層出土品。33・34 は須恵器甕で口縁端部は内方に肥厚し、口縁中位に１条の沈線が巡る。8 世紀。35 は須恵器椀の胴部片で、胴部上位に回転カキメ調整を施す。36 は須恵器高坏で、柱部中位に沈線２条が巡る。7 世紀。37 は須恵器坏の底部片で、高台は底体部境界付近に付き、外方に開く。底部外面には、回転ヘラケズリ調整を施す。38 は土師器坏の底部片で、平底をなす。底部外面調整は、摩滅により不明である。8 世紀。39 は甕形土器で、口縁端部はわずかに上方につまみ上げられている。胴部外面にはタテないしナナメ方向のハケメ調整を施した後、胴部上位にはヨコ方向のハケメ調整を施す。なお、内面にはヘラケズリ調整を施す。40 は広口壺で、口縁端部は丸く仕上げる。胴部内面にはヘラケズリ調整を加える。41 は高坏形土器で、坏部下位には明瞭な稜をもつ。39 ～ 41 は弥生時代末。

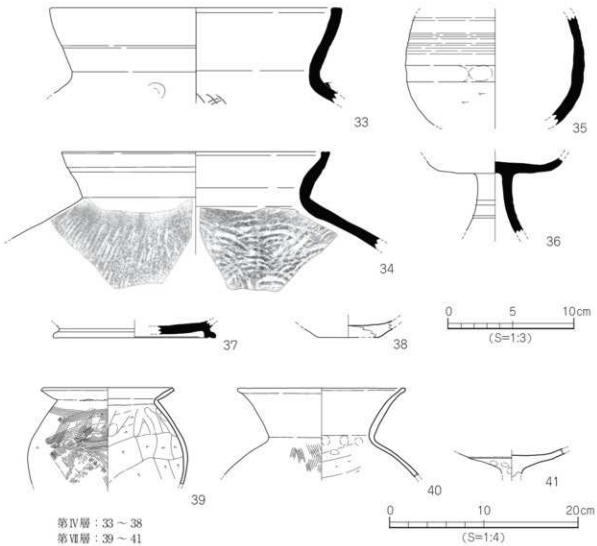
2）グリッド出土遺物

42・43 は甕形土器で口縁端部を上方に拡張し、口縁端面に凹線文１条を施す。弥生時代中期後半。44 ～ 46 は壺形土器。44・45 は広口壺で、44 の頸部には断面三角形状の凸帯を貼付ける。弥生時代中期中葉。45 は口縁端部を上下方に拡張し、口縁端面に凹線文２条を施す。弥生時代中期後半。46 は小片のため、器種特定が難しいが、ここでは壺形土器として扱う。口縁端面と口縁部内面には径 0.5cm 大の孔を穿つ。47 ～ 49 は壺形土器の肩部片。47 は肩部に列点文、48・49 は頸部に凸帯を貼付け、凸帯上に押圧を施す。弥生時代中期後半。50・51 は甕形土器で 50 は平底、51 はくびれをもつ上げ底をなす。50 は弥生時代後期、51 は弥生時代中期後半。52・53 は壺形土器で、53 は突出する平底となる。54 は鉢形土器、55 はミニチュア品の底部である。52・53 は弥生時代後期、54 は弥生時代末。

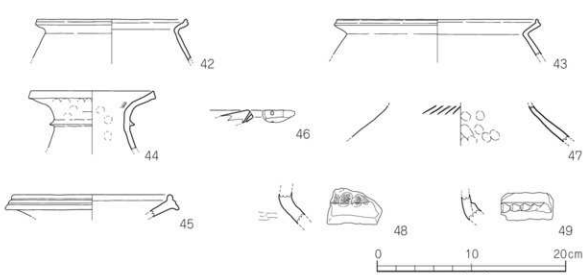
56 は土師器の小型壺で口縁部は内湾し、胴部外面にはわずかにハケメ痕が残る。5 世紀。57 は土師器甕の口縁部小片で、口縁部は内湾し口縁端部は「コ」字状に仕上げる。7 ～ 8 世紀。58 は須恵器**鉢**で、肩胴部境界に沈線と径 1.6 cm 大の孔を穿つ。7 世紀。59 は須恵器壺の底部片で、底部外面に回転ヘラケズリ調整を施す。7 ～ 8 世紀。60 はサヌカイト製の石鏃である。

3）撹乱・トレンチ出土遺物

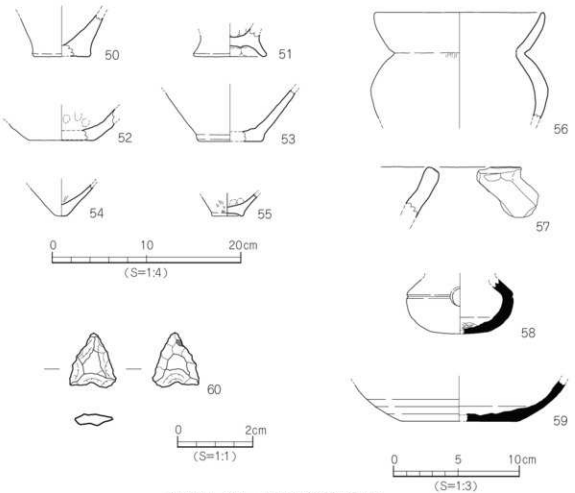
61・62・64 ～ 68・71・72 は撹乱、63・69・70 はトレンチ出土品。61 は須恵器坏蓋で、口縁部は内方へ屈曲する。外面に火だすき痕を残す。62 は須恵器坏で、高台は底体部境界付近よりやや内側に付く。8 世紀中葉～後半。63 は東播系須恵器擂鉢の底部片である。13 世紀。64 は瓦質土器の坏で、高台は「ハ」の字状に開き丸みをもつ。8 世紀。65 は土師器坏で、円盤状の底部をなす。10 世紀。66 は土師器皿で、底部切り離しは回転糸切り技法による。67・68 は土師器土釜の脚部片で、断面形態は円形をなす。13 ～ 14 世紀。69 は弥生時代中期後半～後期初頭の甕形土器で、口縁端部はナデ凹む。70 は壺形土器の頸部片で凸帯を貼付け、凸帯上に斜格子目文を施す。弥生時代後期。71 は弥生時代中期後半の高坏形土器で、柱部にヘラ描き沈線文８条と未完通の矢羽根状透かし、脚裾部には凹線文３条を施す。72 は鉄製の鉋で、柄部を欠損している。重量 7.43g を測る。



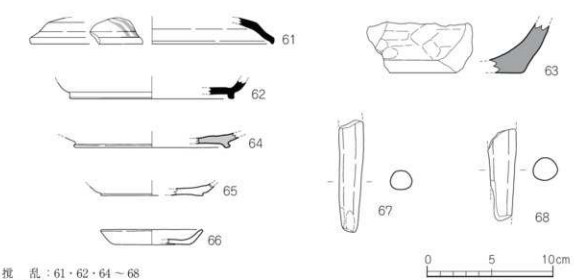
第 28 図　包含層出土遺物実測図



第 29 図　グリッド出土遺物実測図（1）

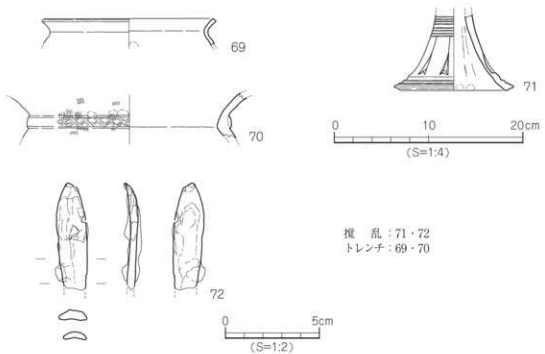


第30図　グリッド出土遺物実測図（2）



撹　乱：61・62・64～68
トレンチ：63

第31図　撹乱・トレンチ出土遺物実測図（1）



第32図　攪乱・トレンチ出土遺物実測図（2）

4．小　結

今回の調査では、調査の目的であった平形銅剣に関する直接的な資料は得られなかったものの、弥生時代から中世までの遺構や遺物を確認することができた。検出した遺構のうち時期特定しうる遺構は、弥生時代中期後半期の土坑ＳＫ４のほか弥生時代中期後半から古墳時代初頭まで存続したと推測される溝ＳＤ２である。ＳＫ４は断面形態より貯蔵穴の可能性が高い遺構であり、凹線文期の一括性の高い土器類が土坑内から出土している。また、ＳＤ２は部分的な検出であり全体像は断定しえないが、深さ約１m、推定幅４mを超える「L」字状に折れ曲がる大溝で、溝内からは弥生時代中期後半から末葉に時期比定される土器が数多く出土した。溝の形状より、ＳＤ２は集落を区画するための濠として機能していた可能性の高い遺構である。松山平野における弥生時代中期後半期の大溝は、来住台地東方にある久米窪田古屋敷Ｃ遺跡にて検出されている。遺跡で検出したＳＤ４は幅5.7 m、深さ0.80 mを測る大溝で、今回の調査と同様、「L」字状に折れ曲がる形状をなす。松山平野内における凹線文期の集落は文京地区をはじめ平野全域に散見されるが、このような大溝の検出事例は極めて少なく、今後は道後地区のみならず、平野全域における凹線文期の集落構造の詳細な解明が必要となる。

このほか時期特定はしえないが、掘立柱建物や溝、土坑は古墳時代以前に掘削された可能性が高い遺構である。さらに包含層資料ではあるが古代、奈良時代に時期比定される須恵器や土師器の出土は、調査地や近隣地域に古代集落が存在することを裏付けるものといえよう。

【参考文献】
岡田　敏彦　1985『道後今市遺跡』
和田　千吉　1909『考古界 第８篇 第５号』
宮内　慎一　1992「道後今市遺跡６次調査」『松山市文化財調査報告書第 30 集』
相原　浩二　1992「道後今市遺跡８次調査」『松山市文化財調査報告書第 30 集』
宮内　慎一　1992「久米窪田古屋敷Ｃ遺跡」『松山市文化財調査報告書第 27 集』

遺構・遺物　－凡例－

(1) 以下の表は、本調査検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。

(2) 遺物観察表の各掲載について。

法　量　欄　（　）：推定復元値。

調　整　欄　土器の各部位名称を略記した。

例）口→口縁部、肩→肩部、肩胴→肩胴部、胴→胴部、胴上→胴部上半、胴下→胴部下半、底→底部、坏→坏部、脚→脚部

胎土欄・焼成欄　胎土欄では混和剤を略記した。

例）長→長石、石→石英、密→精製土、金→金雲母

（　）の中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。

例）石・長（１～４）→「１～４㎜大の石英・長石を含む」である。

焼成欄の略記について。◎→良好

表 10　掘立柱建物一覧

掘立	地　区	規模（間）	桁行長（m）	梁行長（m）	床面積（㎡）	時　期	備　考
1	Ｃ２～Ｄ３	１×（1）	（2.20）	3.54	6.30	古墳時代以前	ＳＫ１・４を切る

表 11　溝一覧

溝（ＳＤ）	地　区	断面形	規模（m）長さ×幅×深さ	方　向	埋　土	出土遺物	時　期	備　考
1	Ｃ１～Ｄ２	皿状	（2.80）×0.90×0.15	南北	黒褐色砂質土	弥生・土師・須恵	古墳時代以前	
2	Ａ４～Ｃ１	逆台形状	9.90×（3.70）×0.95	「Ｌ」字状	緑灰色砂質シルト他	弥生	弥生中期後半～古墳初頭	ＳＫ３を切る

表12　土坑一覧

土坑（ＳＫ）	地　区	平面形	断面形	規模（m）長径×短径×深さ	埋　土	出土遺物	時　期	備　考
1	C・D3	円形	筒状	1.15 × 1.05 × 0.20	褐色シルト		古墳時代以前	掘立1に切られる
2	C2～D3	楕円形	逆台形状	1.66 × 1.20 × 0.20	黒色シルト		古墳時代以前	ＳＰ3・4を切る
3	C2	（楕円形）	逆台形状	（1.32）×（1.15）× 0.15	暗褐色シルト（黄色シルト混入）		古墳時代以前	ＳＤ2に切られる
4	D2	方形	筒状	1.35 ×（1.10）× 0.30	暗褐色シルト他	弥生	弥生中期後半	掘立1・ＳＰ7に切られる

表13　柱穴一覧

柱穴（ＳＰ）	地　区	平面形	規模（m）長径×短径×深さ	埋　土	出土遺物	備　考
1	C3	楕円形	1.00 × 0.80 × 0.35	暗茶褐色シルト（黒色シルト混入）	石	掘立1
2	B・C2	円形	0.63 × 0.54 × 0.06	暗褐色シルト	弥生	掘立1
3	C3	（円形）	（0.84）× 0.65 × 0.06	暗褐色シルト（黄色シルト混入）		ＳＫ1・2に切られる
4	C3	（円形）	（0.65）×（0.60）× 0.06	暗褐色シルト（黄色シルト混入）		ＳＫ2に切られる
5	C2	楕円形	0.45 × 0.26 × 0.13	暗褐色シルト（黄色シルト混入）		ＳＫ3基底面検出
6	B2	（円形）	0.66 ×（0.60）× 0.14	暗褐色シルト	弥生	掘立1
7	B2	円形	0.60 × 0.58 × 0.40	暗褐色シルト（黄色シルト混入）		ＳＫ4を切る
8	B・C2	円形	0.65 ×（0.62）× 0.40	暗褐色シルト（黄色シルト混入）		掘立1に切られる

表14　掘立1出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
1	壺	残高　9.8	肩胴部片。1/4の残存。	ヘラミガキ	ナデ（指頭痕）	橙色 橙色	石・長（1）◎	ＳＰ6	
2	壺	底径（10.0）残高　3.4	平底。1/4の残存。	ナデ	ナデ	にぶい褐色 にぶい橙色	石・長（1～3）◎	ＳＰ2	

表15　ＳＤ１出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
3	壺	残高　2.0	口縁端部は上方に拡張し、凹線文３条を施す。小片。	ナデ	ナデ	橙色 橙色	石・長（1～2） ○		
4	壺	底径　(8.6) 残高　4.6	平底。4/5の残存。	ナデ	ナデ	にぶい褐色 にぶい褐色	石・長（1） ○	黒斑	

表16　ＳＤ２出土遺物観察表　土製品　(1)

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
5	甕	口径（20.0） 残高　3.4	「く」の字状口縁。	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長（1～2） ○	B２	15
6	甕	残高　5.4	押圧凸帯文。小片。	ナデ	ナデ	橙色 橙色	石・長（1～2） ○		
7	甕	口径（26.0） 残高　3.1	貼付口縁。櫛描き沈線文６条以上。小片。	マメツ	マメツ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長（1～4） ○		15
8	甕	残高　8.7	胴部片。1/4の残存。	ハケ（6本/cm） →タタキ	ハケ（4本/cm） →板ナデ	橙色 橙色	石・長（1～2） ○		
9	甕	残高　8.3	胴部片。	ナデ	ナデ	橙色 橙色	石・長（1～2） ○	B３	
10	甕	底径　8.2 残高　8.0	上げ底。ヘラ状工具による刻目あり。	ナデ	ナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長（1～3） ○	黒斑	15
11	甕	底径　(8.2) 残高　4.6	上げ底。	ヘラミガキ	ナデ	橙色 橙色	石・長（1～2） ○	黒斑	
12	甕	底径　(7.8) 残高　4.0	くびれ上げ底。	ナデ	マメツ	にぶい橙色 灰黄褐色	石・長（1～3） ○	B2	
13	甕	底径　(6.2) 残高　4.4	厚みのある上げ底。	マメツ	マメツ	橙色 にぶい橙色	石・長（1～3） ○	B2	
14	甕	底径　(6.4) 残高　5.3	やや上げ底。底部内面に指頭痕あり。	ヘラミガキ	ナデ	橙色 橙色	密 ○		15
15	甕	底径　(2.6) 残高　3.5	わずかに上げ底。	ナデ	ナデ	にぶい褐色 にぶい褐色	石・長（1～4） ○		
16	甕	底径　3.0 残高　4.1	平底。	マメツ	マメツ	橙色 橙色	石・長（1～3） ○	A３	
17	甕	底径　(3.6) 残高　2.4	平底。	マメツ	マメツ	にぶい橙色 灰黄褐色	石・長（1～3） ○	B３	
18	壺	底径　(8.2) 残高　4.5	わずかに上げ底。1/3の残存。	ナデ→ミガキ	ナデ	にぶい黄褐色 にぶい黄橙色	石・長（1～2） ○	黒斑	
19	壺	底径　(6.4) 残高　3.3	突出部をもつ平底。	マメツ	マメツ	橙色 にぶい黄橙色	石・長（1～4） ○	B２	
20	壺	底径　(6.0) 残高　2.8	平底。	マメツ	ハケ（9本/cm）	にぶい黄橙色 褐灰色	石・長（1～3） ○	B２	

ＳＤ２出土遺物観察表　土製品　(2)

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 （外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
21	壺	底径 (9.0) 残高 6.8	平底。1/2の残存。	ヘラミガキ	マメツ	灰黄褐色 にぶい黄橙色	石・長(1～3) 金 ○	B１	15
22	壺	底径 (9.8) 残高 9.9	平底。	ナデ（ミガキ）	ナデ	にぶい褐色 にぶい褐色	石・長(1～2) ○		
23	壺	底径 4.2 残高 11.6	平底。大型品。	㊀ヘラミガキ ㊁ハケ(4～5本/cm)	ハケ(4～5本/cm)	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	石・長 (1) ○		15
24	高坏	底径 13.0 残高 12.7	ヘラ描き沈線文10条＋凹線文3条＋矢羽根状透かし（未貫通）12ヶ。脚部完存品。	㊀ ヘラミガキ ㊁ ナデ	ナデ	にぶい褐色 にぶい褐色	石・長(1～2) ○		15
25	高坏	底径 (7.4) 残高 6.9	ヘラ描き沈線文7条＋凹線文3条＋未貫通の矢羽根状透かし。1/2の残存。	ハケ→ナデ	ナデ	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	石・長 (1) ○	黒斑	15
26	甕	口径 (17.2) 残高 10.8	「く」の字状口縁。1/4の残存。	㊀ ヨコナデ ㊁ ハケ(4本/cm)	㊀ ヨコナデ ㊁ ヘラケズリ	にぶい褐色 にぶい橙色	石・長(1～2) ○	煤 黒斑	15
27	甕	底径 5.8 残高 5.9	くびれ上げ底。	ヘラミガキ	ナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長(1～2) ○		
28	壺	口径 (13.0) 残高 3.3	広口壺。垂下口縁。	㊀ ヨコナデ ㊁ ハケ9本/cm	㊀ ヨコナデ ㊁ ナデ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石・長(1～2) 金 ○	B２	15
29	壺	底径 (17.0) 残高 4.8	広口壺。	ナデ	ナデ	灰白色 灰白色	石・長(1～3) ○		

表17　ＳＫ４出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 （外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
30	甕	口径 (31.4) 残高 15.7	大型品。口縁端部に刻目、押圧凸帯、凸帯上に布目痕。	ナデ	ナデ	橙色 橙色	石・長(1～2) ○		16
31	甕	残高 7.8	「く」の字状口縁。小片。	㊀ ヨコナデ ㊁ ハケ(11本/cm)	㊀ ヨコナデ ㊁ ナデ	明赤褐色 褐灰白色	石・長(1～4) ○		
32	甕	底径 3.0 残高 10.8	平底。	ハケ(5～6本/cm)	㊀ ナデ ㊁ ハケ(6～7本/cm)	橙色 橙色	石・長(1～2) ○		16

表18　包含層出土遺物観察表　土製品　(1)

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 （外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
33	甕	口径 (23.1) 残高 7.4	口縁端部は内方に肥厚し、口縁中位に１条の沈線が巡る。	㊀ 回転ナデ ㊁ 平行叩き	㊀ 回転ナデ ㊁ 円弧叩き	灰オリーブ色 灰色	密 ○	第Ⅳ層 自然釉	
34	甕	口径 (21.1) 残高 7.7	口縁端部は内方に肥厚し、口縁中位に１条の沈線が巡る。口縁端面はナデにより凹む。	㊀ 回転ナデ ㊁ 平行叩き	㊀ 回転ナデ ㊁ 円弧叩き	灰色 灰色	密 ○	第Ⅳ層	16
35	鉢	残高 8.7	胴上半部に回転カキメ調整を施す。	㊀回転ナデ ㊁回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰色 灰白色	密 ○	第Ⅳ層	16

包含層出土遺物観察表　土製品　(2)

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
36	高坏	残高　6.0	柱部に沈線２条あり。	㋐ 回転ヘラケズリ ㋑ 回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰白色	密 ○	第Ⅳ層	16
37	坏	底径（12.9） 残高　1.3	高台は「ハ」の字状に開き、高台端面はナデ凹む。	回転ヘラケズリ	マメツ	灰白色 灰白色	密 ○	第Ⅳ層	
38	坏	底径（4.8） 残高　1.3	平底。小片。	マメツ	マメツ	浅黄橙色 浅黄橙色	密 ○	第Ⅳ層	
39	甕	底径（13.6） 残高　10.4	口縁端部はわずかに上方へつまみ上げる。	㋐ ヨコナデ ㋑ ハケ6～7本/cm	㋐ ヨコナデ ㋑ ヘラケズリ	浅黄色 浅黄色	石・長（1～2） ○	第Ⅳ層	16
40	壺	口径（17.4） 残高　9.4	広口壺。	㋐ ヨコナデ ㋑ ハケ（8本/cm）	㋐ ヨコナデ ㋑ ケズリ	にぶい褐色 にぶい褐色	石・長（1～3） 金 ○	第Ⅳ層	16
41	高坏	残高　2.6	坏下部に明瞭な稜をもつ。	ナデ	ナデ	橙色 橙色	石・長（1） ○	第Ⅳ層	

表19　グリッド出土遺物観察表　土製品　(1)

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
42	甕	口径（15.8） 残高　4.4	口縁端面に凹線文１条あり。	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石・長（1） ○	Ｂ２	
43	甕	口径（21.0） 残高　3.8	口縁端面に凹線文１条あり。	㋐ ヨコナデ ㋑ ナデ	㋐ ヨコナデ ㋑ ナデ	橙色 橙色	石・長（1） ○	Ｂ２	
44	壺	口径（13.0） 残高　6.3	広口壺。断面三角形の貼付凸帯。	マメツ	マメツ （一部ハケ痕有）	橙色 橙色	石・長（1～3） 金 ○	Ｂ３	
45	壺	口径（16.6） 残高　2.3	広口壺。凹線文２条あり。	ナデ	ナデ	橙色 橙色	石・長（1） ○	Ｂ４	
46	壺	残高　1.3	広口壺。口縁端面に径0.5cm大の円孔あり。小片。	ナデ	ナデ	灰黄褐色 黒褐色	石・長（1） ○	Ｃ２	16
47	壺	残高　3.8	肩部に列点文を施す。1/6の残存。胎土中に赤色酸化土粒を含む。	ナデ	ナデ	橙色 橙色	石・長（1～2） ○	Ｃ４	
48	壺	残高　3.4	貼付凸帯。凸帯上に布目状圧痕あり。	ナデ	ナデ	にぶい橙色 にぶい黄橙色	石・長（1～4） ○	Ｃ４	
49	壺	残高　2.8	貼付凸帯。凸帯上に押圧あり。	マメツ	マメツ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長（1～5） ○	Ｄ２	
50	甕	底径　(5.8) 残高　4.4	平底。	マメツ	マメツ	橙色 にぶい褐色	石・長（1～2） ○	Ａ３	
51	甕	底径　(7.6) 残高　3.0	くびれ上げ底。	ナデ	ナデ	橙色 橙色	石・長（1～2） ○	Ｂ１ 黒斑	
52	壺	底径　(7.0) 残高　3.3	平底。1/3の残存。	マメツ	マメツ	にぶい赤褐色 にぶい橙色	石・長（1～3） ○	黒斑	
53	壺	底径　(6.6) 残高　5.5	平底。1/4の残存。	㋐ ナデ ㋑ マメツ	ナデ	橙色 橙色	石・長（1～5） ○		

グリッド出土遺物観察表　土製品　(2)

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
54	鉢	底径 1.2 残高 3.3	小さな平底。	マメツ	マメツ	橙色 橙色	石・長（1～3） ○	B 1	
55	ミニチュア	底径 3.4 残高 2.3	上げ底。	ハケ→ナデ	ナデ	橙色 橙色	石・長（1～3） ○	B 2 黒斑	
56	壺	口径（13.2） 残高 8.4	口縁部は内湾し、口縁端部は尖り気味に丸い。	㋐ ナデ ㋑ ナデ（一部ヘラ状具）	ナデ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石・長（1） ○	B 2	
57	甕	残高 4.0	内湾口縁。口縁端部は「コ」字状に仕上げる。小片。	ナデ	ナデ	明褐色 にぶい褐色	石・長（1～4） ○	B 4	
58	鉢	底径 （4.0） 残高 4.3	屑胴部境に沈線1条と径1.5cm大の孔を穿つ。	㋐ 回転ナデ ㋑ 回転ヘラケズリ	㋐㋑回転ナデ ㋒ 円弧叩き	灰色 灰色	密 ○	C 1	16
59	壺	底径 （9.4） 残高 3.2	平底。	回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ○	C 2	

表20　グリッド出土遺物観察表　石製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ（cm）	法量 幅（cm）	法量 厚さ（cm）	法量 重さ（g）	備考	図版
60	石鏃	完形	サヌカイト	1.4	1.2	0.22	0.36	B 2	16

表21　撹乱・トレンチ出土遺物観察表　土製品　(1)

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
61	坏蓋	口径（19.0） 残高 2.1	天井部は稜をなし、口縁部は内方へ屈曲する。外面に火だすき痕が残る。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	密 ○	撹乱	
62	坏	底径（13.0） 残高 1.5	直立高台。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	密 ○	撹乱	
63	擂鉢	残高 3.9	東播系。小片。	回転ナデ	ナデ	灰色 灰色	密 ○	トレンチ	
64	坏	底径（12.4） 残高 1.1	瓦質土器。「ハ」の字状高台。	マメツ	ナデ	灰白色 灰白色	密 ○	撹乱	
65	坏	底径 （8.0） 残高 0.9	底部片。1/4の残存。	マメツ	ナデ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	長（1） ○	撹乱	
66	皿	口径 （8.1） 底径 （6.0） 器高 1.2	底部の切り離しは、回転糸切り技法による。1/2の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長（1） ○	撹乱	
67	土釜	残高 8.4	脚部片。断面円形。	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石・長（1） ○	撹乱	
68	土釜	残高 7.1	脚部片。断面円形。	ナデ	ナデ	黄褐色 黄褐色	石・長（1） ○	撹乱	

撹乱・トレンチ出土遺物観察表　土製品　(2)

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
69	甕	口径（18.0） 残高　2.9	「く」の字状口縁。小片。	ナデ	ナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長（1） ○	トレンチ	
70	壺	残高　4.7	貼付凸帯。凸帯上に斜格子目文あり。	ハケ→ナデ	ナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長（1～2） ○	トレンチ	
71	高坏	底径（11.0） 残高　8.1	ヘラ描き沈線文８条＋凹線文３条＋矢羽根状透かし（未貫通）。	ナデ	ナデ	褐色 褐色	石・長（1～2） ○	撹乱 黒斑	

表 22　撹乱・トレンチ出土遺物観察表　鉄製品

番号	器種	残存	法量 長さ（cm）	法量 幅（cm）	法量 厚さ（cm）	法量 重さ（g）	備考	図版
72	鉋	2/3	5.65	1.75	0.48	7.43	撹乱	16

第 4 章

道後今市遺跡 11 次調査

第４章　道後今市遺跡 11 次調査

1. 調査の経過

(1) 調査に至る経緯

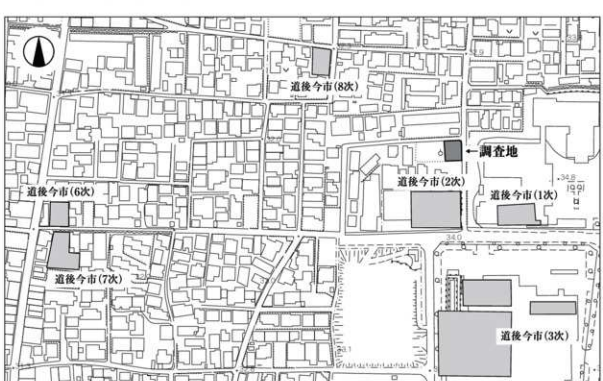
1997（平成９）年 12 月、松山市道後今市 998 番 14 における宅地開発に伴う埋蔵文化財の確認願いが、申請者より松山市教育委員会文化教育課（以下、文化教育課・現文化財課）に提出された。確認願いが申請された道後今市は、松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地『No. 68 今市遺物包含地』内にあり、周知の遺跡として知られている。包含地内には、これまでに道後今市遺跡としては 14 次にわたる調査が実施され（注 1）、弥生時代～中世の集落関連遺構を多数確認している（表２、第１図）。

文化教育課は、確認願いが申請された地点について遺跡の有無と、さらにはその範囲や性格を確認するために、同年 12 月 24 日、試掘調査を実施した。試掘調査の結果、申請地では溝・柱穴などの遺構と弥生土器が検出され、弥生時代の集落関連遺構があることを確認した。

この結果を受け文化教育課と地権者の二者は、遺跡の取り扱いについての協議を行い、建物の建築によって失われる遺構と遺物について記録保存のための事前の発掘調査が必要と判断された。発掘調査は、国補補助を受け弥生時代の集落関連遺構の広がりの確認を主目的とし、文化教育課からの委託を受け、財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センターが 1998（平成 10）年２月 26 日より本格調査を実施した。

[注]

1. 表２のとおり、平成 20 年２月には 14 次調査が実施されている。



第 33 図　調査地位置図（1）（S=1：3,000）

(2) 調査の経緯

1998（平成 10）年 2 月 26 日に調査事務所を設置する。3 月 2 日に調査区を設定し重機により掘削を行う。3 日に遺構検出作業を行う。4 日に遺構検出状況の写真撮影を行い、その後遺構の掘り下げを開始する。12 日よりＳＢ 1 の南部を拡張する。18 日には遺構を完掘し完掘状況の写真を撮影する。20 日に遺構測量を完了する。31 日に調査区の埋め戻しを行い屋外調査を完了する。

なお、調査にあたり調査区内を 4 m四方のグリッドに区分けを行った。グリッドは北から南へ 1･2･3･4 とし、東から西へＡ・Ｂ・Ｃ・Ｄと設定した。

(3) 調査組織

調　査　地　松山市道後今市 998 番 14
道　跡　名　道後今市遺跡 11 次調査
調 査 期 間　1998（平成 10）年 2 月 26 日～同年 3 月 31 日
調 査 面 積　199.38㎡
調 査 担 当　相原　浩二・山之内志郎
調査作業員　池田　平・宇都宮　東吾・岡山　卓郎・久保　浩二・酒井　直哉・坪内　寛美・中路　勝己・藤本　清志・三浦　良介・宮田　義一・横森　淳一・萩野　ちよみ・吉井　信枝

第 34 図　調査地位置図（2）

2. 層位（第35図）

基本層位は、7層に分層でき、第Ⅰ層耕作土、第Ⅱ層床土、第Ⅲ層黄色微砂質土、第Ⅳ層茶褐色シルト、第Ⅴ層黄色微砂質土（地山）、第Ⅵ層暗黄色砂質土、第Ⅶ層灰色粗砂質土である。なお、本調査区の旧地形は北西から南東へ緩やかに傾斜する。

第Ⅰ層：混入土壌の差によって二層に細分した。第Ⅰ－①層は灰色砂質土の耕作土である。調査区全域に厚さ8～30cmで堆積する。第Ⅰ－②層は褐色混じりの灰色砂質土の旧耕作土であり厚さ5～25cmで堆積する。

第Ⅱ層：粘性の差によって二層に細分した。第Ⅱ－①層は黄白色微砂質土で耕作土の床土である。厚さ10～26cmで調査区北部に堆積する。第Ⅱ－②層はやや粘性の黄色シルトで旧耕作土の床土である。調査区全域に厚さ12～45cmで堆積する。

第Ⅲ層：明暗の差によって二層に細分した。第Ⅲ－①層は黄色微砂質土で、厚さ5cmで調査区南東部に堆積する。部分的に第Ⅲ－②層とした暗黄色微砂質土の層がある。

第Ⅳ層：茶褐色シルトで遺物包含層であり、明暗の差によって二層に細分した。第Ⅳ－①層は明茶褐色を呈し、厚さ8cmで調査区北部に堆積する。それに対し、暗茶褐色を呈する第Ⅳ－②層は、厚さ10～16cmで調査区全域に堆積する。

第Ⅴ層：基盤面とした黄色微砂質土の層で、調査区北壁で厚さ36～92cmを測る。多くの遺構はこの層を切り込んでいる。土坑ＳＫ1は、この層の上層に堆積していた。

第Ⅵ層：第Ⅶ層上面にブロック状に堆積する暗黄色砂質土である。調査区北壁で厚さ4～16cmを測る。ＳＸ2に削平される。

第Ⅶ層：砂礫の大小や明暗によって三層に細分した。第Ⅶ－①層は灰色粗砂質土である。調査区北壁で厚さ4～60cmを測る。ＳＸ2と第Ⅵ層に削平される。上層は5～10cm大の礫石を含む。第Ⅶ－②層は暗灰色微砂質土である。最も厚い地点で60cm以上を測る。第Ⅶ－③層は人頭大の礫石を含む灰色粗砂質土である。

3. 遺構と遺物

本調査では、縄文時代～中世の遺構と遺物を検出した。遺構は、竪穴住居1棟、溝2条、土坑6基、柱穴35基、性格不明遺構4基である（第36図）。遺物は、縄文土器・弥生土器・石鏃・石錘・大型粗製刃器・大型打製土掘具・石鏃である。

ここでは主な遺構と遺物について時代別に概説する。

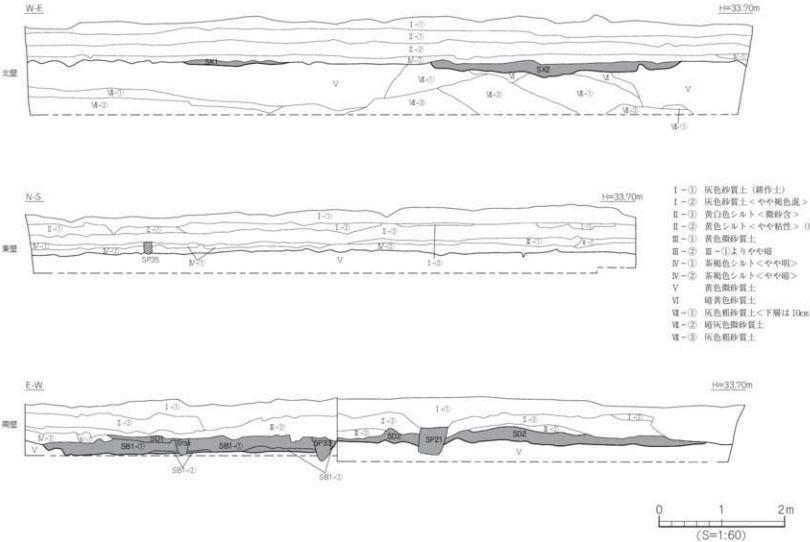
(1) 縄文時代

遺構は土坑1基、遺物は石錘22点である。

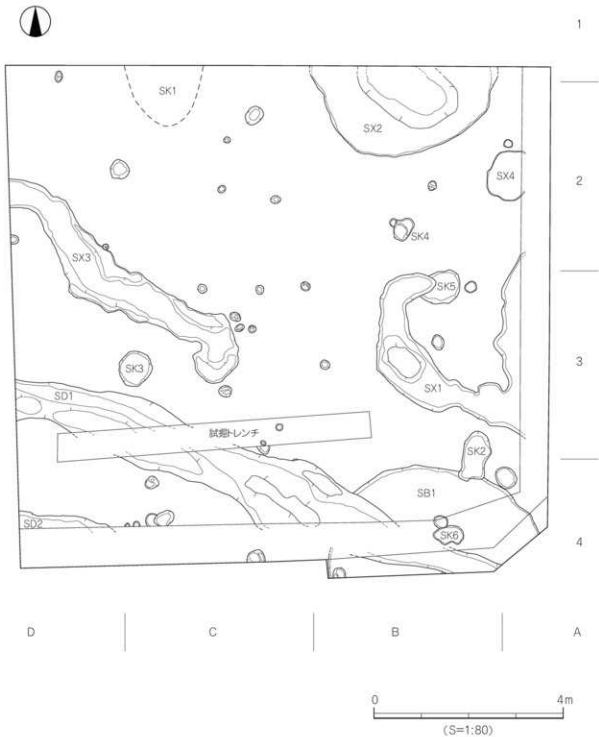
1) 土坑（ＳＫ）

ＳＫ1（第37図）

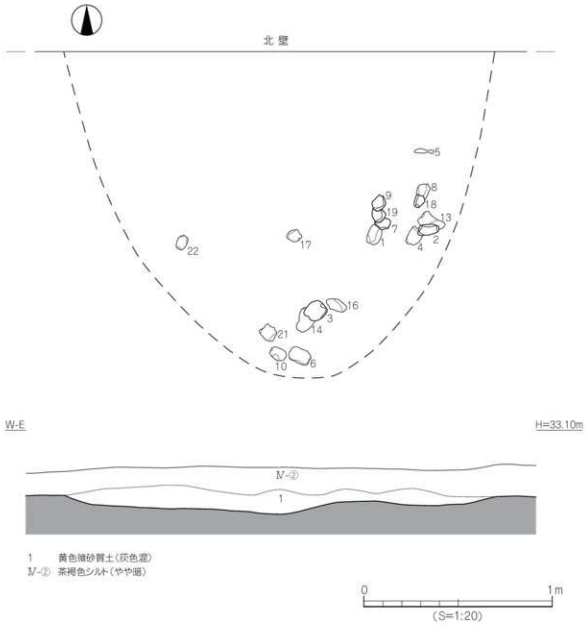
調査区北壁西のＣ1～2区に位置する。北壁トレンチ掘削時に北壁土層において第Ⅴ層上面にわずかな窪みを確認した。平面形態は楕円形を呈し、北側は調査区外に続く。規模は検出長東西1.73m、南北1.30m、深さは北壁部分で10cmを測る。断面形態はレンズ状を呈する。埋土は灰色混じりの黄色微砂質土である。出土遺物は石錘がある。出土状況は、上層にあるものがやや直立した状況、下層にあるものは2～4点の単位で重なった状況で出土した。



第 35 図　北壁・東壁・南壁土層図


1
2
3
4
SK1
SX2
SX4
SK4
SX3
SK5
SK3
SD1
SX1
試掘トレンチ
SK2
SB1
SD2
SK6
D
C
B
A
0
4m
(S=1:80)

第 36 図　遺構配置図



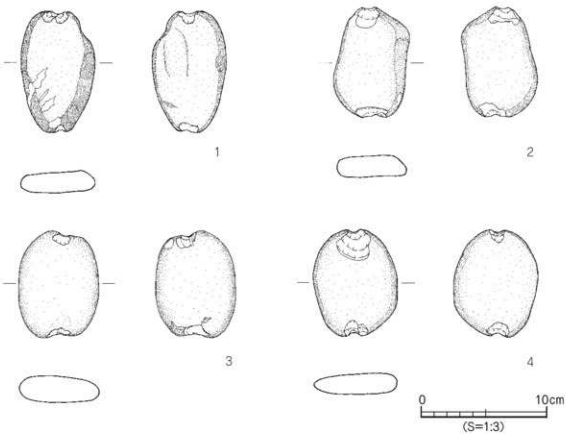
第 37 図　ＳＫ１測量図

出土遺物（第 38 ～ 40 図、図版 18）

1 ～ 22 は石錘である。欠損品を含め 22 点が出土した。形状は扁平な楕円形を呈する礫石で、長軸側縁二ヶ所を敲打によって打ち欠く打欠石錘である。石材は砂岩（1 ～ 12）と花崗岩（13 ～ 22）である。

完形品 19 点（1 ～ 14・17 ～ 21）の法量は、長軸 5.9 ～ 9.5cm、短軸 4.9 ～ 6.8cm、厚さ 1.4 ～ 2.0cm、重量 60.3 ～ 153.8 g を測る。平均値は長軸 7.6cm、短軸 5.8cm、厚さ 1.7cm、重量 116.4 g である。

時期：共伴遺物がないため時期決定は困難であるが、埋土を周辺地域の調査事例、特に道後今市遺跡 10 次調査Ａ区第Ⅸａ層またはＢ区第Ⅵａ層とほぼ同じであるため、縄文時代後期と考えられる。



第38図　ＳＫ１出土遺物実測図（1）

(2) 弥生時代中期

遺構は、竪穴住居１棟、土坑２基、柱穴25基がある。

1）竪穴住居（ＳＢ）

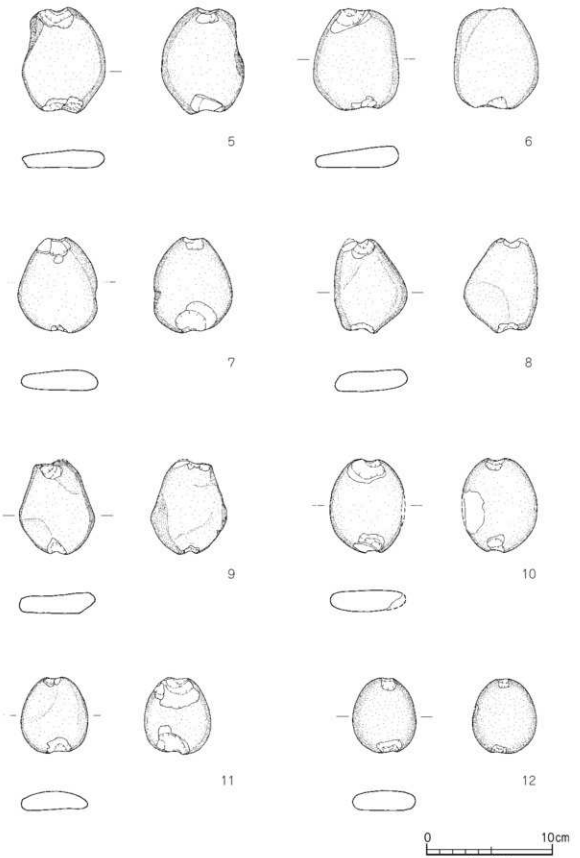
ＳＢ１（第41図、図版19）

調査区南東のＡ～Ｂ４区に位置し、ＳＤ１、ＳＫ２・６、ＳＰ33・34に切られる。平面形態は円形を呈し、南側は調査区外に続く。規模は南北検出長2.28ｍ、東西長4.60ｍを検出した。検出面より壁高は22.6cmを測る。埋土は茶褐色シルトである。住居内部からは主柱穴１本を検出した。出土遺物は、弥生土器、大型粗製刃器、大型打製土掘具、石鏃がある。石鏃の出土状況は、住居北壁近くに70×40cmの範囲内でサヌカイトと石英のチップ多数とともに出土した。

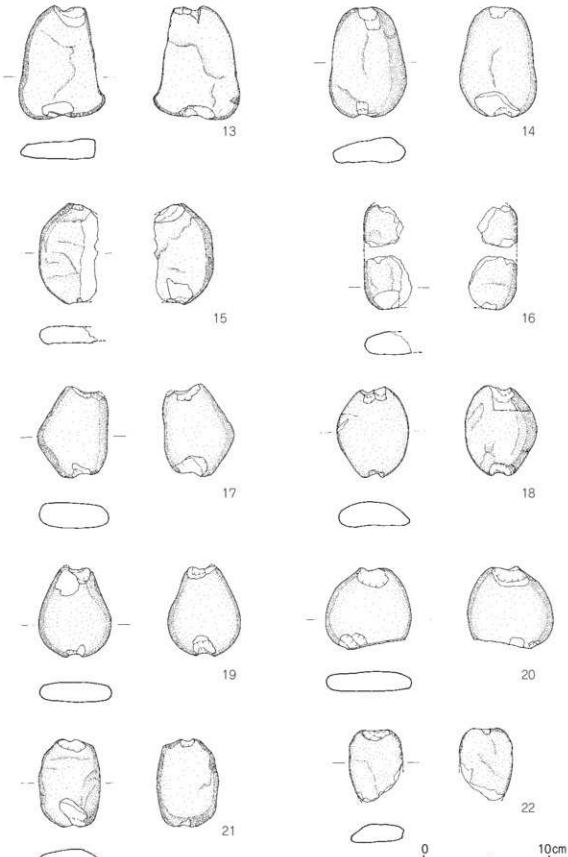
出土遺物（第41図、図版20）

23～27は弥生土器である。23・24は中期の壺形土器、25～27は前期の甕形土器である。28は縄文土器である。29は石鏃で、石材はサヌカイトである。30は大型粗製刃器で、細かい打ち欠きにより刃部を作り出している。石材は流紋岩質安山岩である。31は大型打製土掘具で、剥片の縁辺に刃部を作り出しているが、刃部は使用によって全体的に摩滅している。石材は流紋岩質安山岩である。

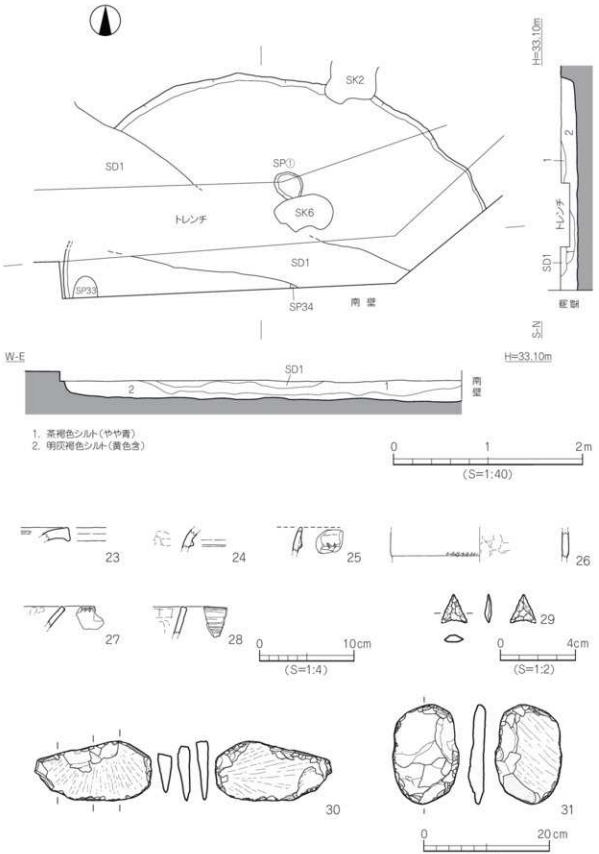
時期：出土した壺形土器の特徴より、弥生時代中期中葉とする。



第 39 図　ＳＫ１出土遺物実測図（2）



第40図　ＳＫ１出土遺物実測図（3）



第 41 図　ＳＢ１測量図・出土遺物実測図

2）土坑（ＳＫ）

ＳＫ３（第 42 図）

調査区中央西のＣ～Ｄ３区に位置する。平面形態は円形である。規模は長径 0.75 m、短径 0.69 m、深さ 15cmを測る。断面形態は皿状を呈する。埋土は茶褐色シルトである。遺物は出土していない。

時期：埋土がＳＢ１と同じであるため、弥生時代中期中葉とする。

ＳＫ５（第 42 図）

調査区中央東のＢ３区に位置し、ＳＸ１に切られる。平面形態は楕円形である。規模は長径 0.90 m、短径 0.68 m、深さ 14cmを測る。断面形態は皿状を呈する。埋土はやや粘質の茶褐色シルトである。遺物は弥生土器がある。

出土遺物（第 42 図）

32 は弥生土器である。中期のジョッキ型土器で、口縁端部は丸く仕上げられている。

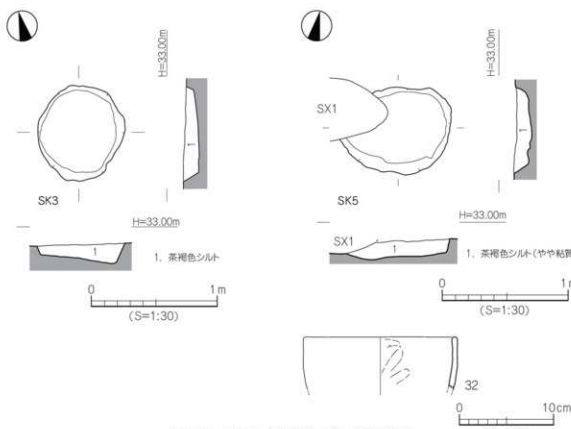
時期：出土遺物 32 の形態と埋土より、弥生時代中期中葉とする。

3）柱穴（ＳＰ）

ＳＰ

柱穴は調査区全域で 25 基を確認した。柱穴は規模によりＡ・Ｂ二分類できる。Ａは径 40cm前後で深さが 10cm以内のもの（２基）、Ｂは径 20cm前後のもの（23 基）である。遺物は出土していない。

時期：埋土がＳＢ１と同じで あるため、弥生時代中期とする。



第 42 図　ＳＫ３・５測量図・出土遺物実測図

(3) 弥生時代中期以降

遺構は、溝２条、性格不明遺構４基、柱穴９基がある。

1) 溝（ＳＤ）

ＳＤ１（第 44 図）

調査区南西～南東のＢ４～Ｄ３区に位置し、南東隅はＳＢ１を切る。規模は検出長 10.50 m、幅 1.70 m、深さ 20cmを測る。断面形態は皿状を呈する。溝底は北岸側が深く、南岸にかけて徐々に浅くなる。埋土は明灰褐色シルトである。遺物は弥生土器がある。

出土遺物（第 44 図）

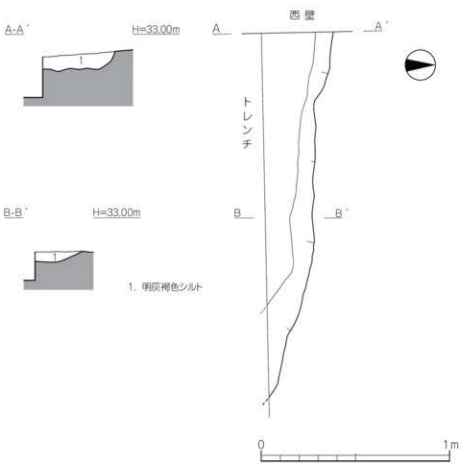
33・34 は弥生土器である。折曲口縁の甕形土器で、34 の口縁端部には刻目を施す。弥生前期。

時期：ＳＢ１との新旧関係より、弥生時代中期中葉以降とする。

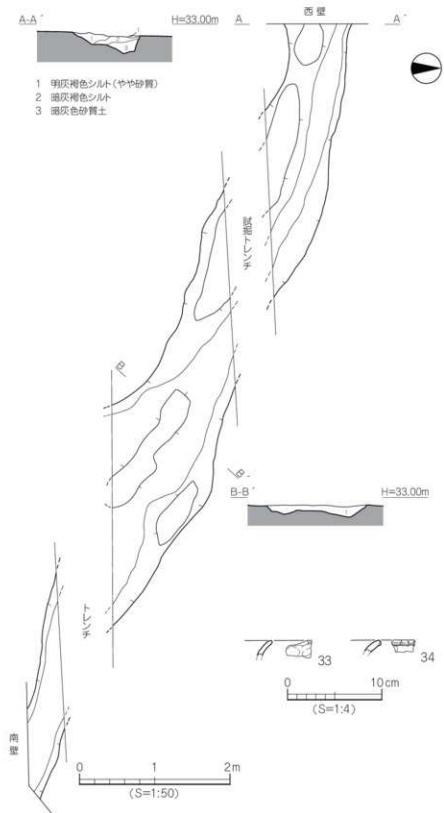
ＳＤ２（第 43 図）

調査区南西隅のＤ４区に位置し、両端ともに調査区外へ続く。規模は検出長 1.92 m、幅 0.38 m、深さ 7cmを測る。断面形態は皿状を呈する。埋土は明灰褐色シルトである。遺物は出土していない。

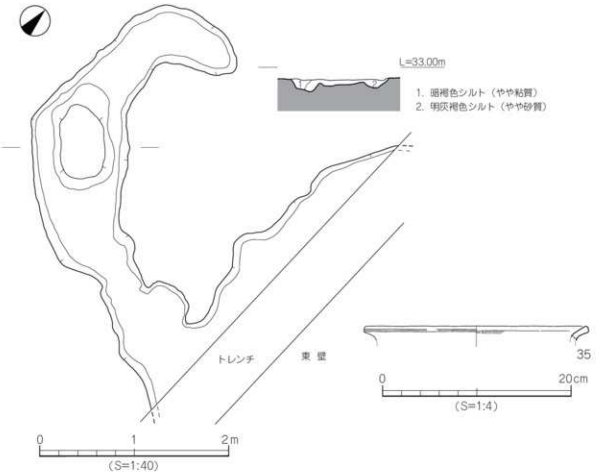
時期：埋土がＳＤ１と同じであるため、弥生時代中期以降とする。



第 43 図　ＳＤ２測量図



第44図　ＳＤ１測量図・出土遺物実測図



第 45 図　ＳＸ１測量図・出土遺物実測図

2）性格不明遺構（ＳＸ）

ＳＸ１（第 45 図）

調査区Ａ２～Ｂ３区に位置する。平面形態は溝状を呈し、東側は調査区外へ続く。規模は検出長 8.40 m、幅 1.04 m、深さ 6cmを測る。断面形態は皿状を呈し、一部で島状に盛り上がった部分が存在する。埋土は明灰褐色シルトで部分的に暗褐色シルトを含む。遺物は弥生土器がある。

出土遺物（第 45 図）

35 は弥生土器である。中～後期の壺形土器の口縁部である。

時期：埋土がＳＤ１と同じであるため、弥生時代中期以降とする。

ＳＸ２（第 36 図）

調査区北東のＢ１～２区に位置する。平面形態は楕円形を呈する。規模は南北長 1.92 m、東西長 4.00 m、深さ 19cmを測る。断面形態は中央部がやや凹む皿状を呈する。埋土は明灰褐色シルトである。遺物は出土していない。

時期：埋土がＳＤ１と同じであるため、弥生時代中期以降とする。

ＳＸ３（第36図）

調査区北西のＣ～Ｄ３区に位置する。平面形態はＳＸ１と同様の溝状遺構である。規模は検出長6.20ｍ、幅長1.20ｍ、深さ13㎝を測る。断面形態はレンズ状を呈する。埋土は明灰褐色シルトである。遺物は出土していない。

時期：埋土がＳＤ１と同じであるため、弥生時代中期以降とする。

ＳＸ４（第36図）

調査区西のＡ～Ｂ２区に位置し、東側をトレンチに切られる。平面形態は楕円形である。規模は検出長1.04ｍ、幅長0.70ｍ、深さ2㎝を測る。断面形態は皿状を呈する。埋土は明灰褐色シルトである。遺物は出土していない。

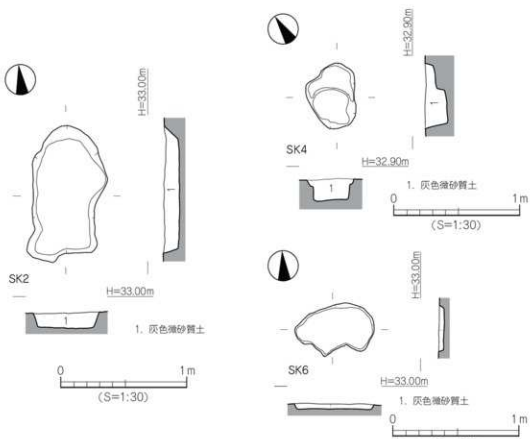
時期：埋土がＳＤ１と同じであるため、弥生時代中期以降とする。

3）柱穴（ＳＰ）

ＳＰ

柱穴は調査区全域で９基を確認した。柱穴は規模によりＡ・Ｂ二分類できる。Ａは径40cm余りのもの（２基）、Ｂは径20cm前後のもの（７基）である。遺物は出土していない。

時期：埋土がＳＸ１と同じであるため、弥生時代中期以降とする。



第46図　ＳＫ２・４・６測量図

(4) 中世以降

遺構は、土坑3基、柱穴1基がある。

1) 土坑（SK）

SK2（第46図）

調査区南東のB3～4区に位置し、SB1を切る。平面形態は不整形である。長径1.01m、短径0.52m、深さ10cmを測る。断面形態は皿状を呈する。埋土は灰色微砂質土である。遺物は出土していない。

時期：埋土が岩崎遺跡の第Ⅱ層と同じであるため、中世以降とする。

SK4（第46図）

調査区中央東のB2区に位置する。平面形態は楕円形である。長径0.50m、短径0.37m、深さ16cmを測る。断面形態は二段堀りの逆台形状を呈する。埋土は灰色微砂質土である。遺物は出土していない。

時期：埋土が岩崎遺跡の第Ⅱ層と同じであるため、中世以降とする。

SK6（第46図）

調査区南東のB4区に位置し、SB1を切る。平面形態は不整形である。長径0.62m、短径0.36m、深さ4cmを測る。断面形態は皿状を呈する。埋土は炭混じりの灰色微砂質土である。遺物は出土していない。

時期：埋土が岩崎遺跡の第Ⅱ層と同じであるため、中世以降とする。

2) 柱穴（SP）

SP

柱穴は1基を確認した。遺物は出土していない。

時期：埋土が岩崎遺跡の第Ⅱ層と同じであるため、中世以降とする。

4. 小　結

本調査では、縄文時代～中世の遺構と遺物を検出した。遺構は竪穴住居１棟、溝２条、土坑６基、柱穴35基、性格不明遺構４基を検出し、遺物は縄文土器・弥生土器・石錘・大型粗製刃器・大型打製土掘具・石鏃が出土した。

ここでは遺構と遺物についてまとめを行なう。

(1) 遺構

1) 縄文時代　本調査では土坑１基を検出した。ＳＫ１は石錘22点がまとまった状態で出土したことから、石錘の廃棄または埋置土坑と推測される。今後の同様の資料増加に期待したい。

2) 弥生時代中期　本調査では竪穴住居１棟、土坑２基、柱穴25基を検出した。当調査地を含む道後城北遺跡群の集落のうつりかわりは、前期後半から中期初頭段階に道後今市遺跡や道後姫塚遺跡などの扇状地から高位部に遺跡の広がりがみられ、中期中葉段階になると祝谷六丁場遺跡にみられるように更に高位部に遺跡の中心が移っていくと考えられている。しかし、本調査区検出のＳＢ１の時期が中期中葉であることから、中期中葉まで扇状地に集落が立地していることが今回の調査によって明らかとなった。

3)弥生時代中期以降　本調査では溝２条、性格不明遺構４基、柱穴９基を検出した。溝ＳＤ１の時期は、ＳＢ１より上層に位置していることから弥生時代中期以降とした。また隣接した12次調査において検出した溝ＳＤ－01は、本調査地のＳＤ１と同一遺構と考えている（注１）。ＳＤ２はＳＤ１と埋土が同じであるため、同時期にほぼ平行して存在していたと考えられる。

性格不明遺構ＳＸ１～４は、平面形態が不整形な点、明確な掘り方を持たない点、底面が平坦でない点などから人工的な遺構ではなく、自然の凹地と判断した。これらの時期は、本調査の結果から弥生時代中期以降と推測されるが、ＳＸ３と12次調査の溝状遺構とが同一遺構と考えられるため、12次調査の竪穴式住居址ＳＢ01との切り合い関係より、古墳時代中期以前のものであろう（注１）。

4) 中世以降　本調査では土坑３基と柱穴１基を検出した。これらの遺構の時期は、時期決定に有効な遺物が出土しなかったため岩崎遺跡の基本層位との比較により、中世以降と推測した。

(2) 遺物

1) 縄文時代　この時代の遺物は縄文土器と石錘がある。ＳＫ１で出土した石錘の出土状況は、上層にあるものがやや直立した状況、下層にあるものは２～４点の単位で重なった状況であった。こうした状況から、石錘は廃棄または埋置された状態のままで原位置を保っている可能性が高く、仮に網に装着されていたとするならば、川での網漁（投網など）に使用されていたものと考えられる。ただし、石錘はゴザなどを編む際の錘として使用されていたとする説もあり、今後の調査成果によって解明されてゆくであろう。石錘は、その用途を推測する際に「長さ」と「重さ」が重要な意味をもつものと考えられるが、下図のとおり本調査で出土した石錘は、大中小の三種に区分できる。すなわち、長軸7.9cm以上、重量121.9ｇ以上を測る大型品（１～６・13・14の８点）、長軸6.4～7.5cm、重量84.0～121.6ｇを測る中型品（7～10・17～21の９点）、長軸5.9～6.0cm、重量60.3～69.5ｇを測る小型品（11・12の２点）に区分できる。

また本調査区内では縄文土器が数点出土していることから、今後は周辺地域での同時代の集落関連遺構の確認が望まれる。

2）弥生時代前・中期　この時代の遺物は、弥生土器と大型粗製刃器・大型打製土掘具・石鏃がある。大型粗製刃器と大型打製土掘具はＳＢ１の床面直上で出土した。前者は植物の切断などの収穫具として、後者が竪穴住居の掘削や根菜類の採取などの土掘り具として使用されていたのではないかと推測される。また同様にＳＢ１の床面直上からは、約 70cm× 40cmの範囲内で石鏃１点とサヌカイト及び石英のチップが多数検出されたことから、住居内での石器の製作または再加工が行われたのではないかと推定される。同住居内では弥生前期土器も出土しており、周辺地域での集落関連遺構の存在が推定される。

本調査では、道後今市遺跡における縄文時代から中世にかけての遺構と遺物を確認することができた。良好な状態での遺物の出土に恵まれなかったが、周辺地域での調査報告や資料収集の蓄積が道後城北遺跡群における集落動態を知る上での有効な手段になることがわかった。今後も各時代における集落の広がりや規模について追求していく必要があろう。

［注］

1. 西尾幸則・政本和人　1999「道後今市遺跡 12 次調査」『松山市埋蔵文化財調査年報 11』
松山市教育委員会・（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

［追記］『松山市埋蔵文化財調査年報Ｘ』（1998）記載の各遺構のうち、本報告では遺構番号を変更している。

年報Ｘ	→	本報告
「石鏃出土地点」		「ＳＫ１」
「ＳＫ１」		「ＳＸ４」

遺構・遺物　－ 凡例 －

（1）以下の表は、本調査地検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。
（2）遺物観察表の各掲載について。

法　量　欄　（　）：推定復元値

胎土欄・焼成欄　胎土欄では混和剤を略記した。
例）長→長石、石→石英、金→金雲母
（　）の中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。
例）石・長（1 ～ 4）→「1 ～ 4㎜大の石英・長石を含む」である。
焼成欄の略記について。◎→良好、○→良、△→不良。

表23　竪穴住居一覧

竪穴（SB）	時　期	平面形	規　模　（m）長さ（長径）×幅（短径）×深さ	埋　土	床面積（㎡）	主柱穴（本）	内部施設				備　考
							高床	土坑	炉	カマド	
1	弥生前～中期	円形	(4.60) × (2.28) × 0.22	茶褐色シルト	8.08	1					SD1、SK2・6に切られる。

表24　溝一覧

溝（SD）	地　区	断面形	規　模　（m）長さ（長径）×幅（短径）×深さ	方　向	埋　土	出土遺物	時　期	備　考
1	B4～D3	皿状	(10.50) × 1.70 × 0.20	北西～南東	明灰褐色シルト	弥生	弥生前～中期以降	SB1を切る。
2	D4	皿状	(1.92) × (0.38) × 0.07	北西～南東	明灰褐色シルト		弥生前～中期以降	

表25　土坑一覧

土坑（SK）	地　区	平面形	断面形	規　模　（m）長さ（長径）×幅（短径）×深さ	床面積（㎡）	埋　土	出土遺物	時　期	備　考
1	C1～C2	楕円形	レンズ状	(1.73) × (1.30) × 0.10	1.48	黄色微砂質土（灰色混）	石錘	縄文後期	
2	B3～B4	不整形	皿状	1.01 × 0.52 × 0.10	0.6	灰色微砂質土		中世以降	SB1を切る。
3	C3～D3	円形	皿状	0.75 × 0.69 × 0.15	0.46	茶褐色シルト		弥生前～中期	
4	B2	楕円形	逆台形状	0.50 × 0.37 × 0.16	0.2	灰色微砂質土		中世以降	
5	B3	楕円形	皿状	(0.90) × 0.68 × 0.14	0.5	茶褐色シルト	弥生	弥生前～中期	SX1に切られる。
6	B4	楕円形	皿状	0.62 × 0.36 × 0.04	0.28	灰色微砂質土（炭混）		中世以降	SB1を切る。

表26　性格不明遺構一覧

性格不明遺構（SX）	地　区	平面形	断面形	規　模　（m）長さ（長径）×幅（短径）×深さ	床面積（㎡）	埋土	出土遺物	時期	備　考
1	A2～B3	溝状	皿状	3.80 × 3.10 × 0.11	4.7	明灰褐色シルト	弥生	弥生前～中期以降	SK5を切る。
2	B1～B2	楕円形	皿状	4.00 × (1.92) × 0.19	5.62	明灰褐色シルト		弥生前～中期以降	
3	C3～D3	溝状	レンズ状	6.20 × 1.20 × 0.13	5.08	明灰褐色シルト		弥生前～中期以降	
4	A2～B2	楕円形	皿状	1.04 × (0.70) × 0.02	0.64	明灰褐色シルト		弥生前～中期以降	

表27　ＳＫ１出土遺物観察表　石製品　(1)

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）		
1	石錘	完形	砂岩	9.5	5.9	1.7	145.6		
2	石錘	完形	砂岩	8.7	5.7	1.65	142.5		
3	石錘	完形	砂岩	8.4	6.3	2.1	171.2		20
4	石錘	完形	砂岩	8.3	6.6	1.6	135.3		
5	石錘	完形	砂岩	8.3	5.5	1.4	121.9		
6	石錘	完形	砂岩	7.9	6.7	1.6	134.2		
7	石錘	完形	砂岩	7.5	6.2	1.6	112.6		
8	石錘	ほぼ完形	砂岩	7.4	5.8	1.8	99.8		
9	石錘	ほぼ完形	砂岩	7.35	6.0	1.6	109.0	花崗岩質砂岩?	
10	石錘	ほぼ完形	砂岩	7.3	5.7+ α	1.7	109.4		
11	石錘	完形	砂岩	6.0	5.3	1.4	60.3		
12	石錘	ほぼ完形	砂岩	5.9	5.0	1.5	69.5		20
13	石錘	完形	花崗岩	8.9	6.8	1.5	127.6	白雲母花崗岩?	
14	石錘	完形	花崗岩	8.7	6.1	2.0	153.8		20
15	石錘	2/3	花崗岩	7.9	4.6	1.55	73.0		
16	石錘	1/4	花崗岩	4.2+3.3+ α	3.7+ α	1.9	60.3	5片	
17	石錘	ほぼ完形	花崗岩	7.2	5.55	2.0	121.6		
18	石錘	完形	花崗岩	7.1	5.7	1.8	102.3	黒雲母花崗岩?	
19	石錘	ほぼ完形	花崗岩	7.0	5.7	1.9	97.6	黒雲母花崗岩?	
20	石錘	完形	花崗岩	6.4	6.8	1.7	113.0	再利用品 黒雲母花崗岩?	

ＳＫ１出土遺物観察表　石製品　(2)

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）		
21	石錘	完形	花崗岩	6.9	4.9	1.6	84.0		20
22	石錘	4/5	花崗岩	5.65	4.2	1.55	55.5		

表28　ＳＢ１出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整		色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
23	壺	残存1.8	広口壺の口縁端部片。口縁端面はナデ凹む。	ヨコナデ	ヨコナデ ミガキ	茶褐色 茶褐色	石・長（1～3） 金 ○		20
24	壺	残存1.9	断面三角形状の張付け凸帯。	ヨコナデ	ヨコナデ	茶褐色 茶褐色	石（1～3） ○		
25	甕	残存2.4	断面三角形状の凸帯を張付け、凸帯上に刻目を施す。	マメツ	マメツ	暗茶色 暗茶色	石・長（1） ○		20
26	甕	残存1.9	粘土帯張付による段を持ち、段部に刻目を施す。	ナデ	マメツ	灰褐色 茶褐色	石・長（1～2） 金 ○		20
27	甕	残存2.8	口縁下端部に刻目。	ヨコナデ ナデ	マメツ	灰黄色 灰黄色	石・長（1～2） 金 ○		
28	深鉢	残存3.2	口縁部片。	ヨコナデ	ヨコナデ	茶褐色 茶褐色	石・長（1） 金 ○		20

表29　ＳＢ１出土遺物観察表　石製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）		
29	石鏃	ほぼ完形	サヌカイト	1.5	1.2	0.35	0.47		20
30	大型粗製刃器	完形	流紋岩質安山岩	18.5	9.3	2.3	440		20
31	大型打製土掘具	完形	流紋岩質安山岩	15.8	10.5	2.9	540		20

表30　ＳＫ５出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整		色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
32	ジョッキ型	口径（16.2） 残高　5.6	口縁部片。	マメツ	マメツ	灰褐色 黄灰褐色	石・長（1～3） 金 ○		

表31　ＳＤ１出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
33	甕	残高　1.9	折曲口縁。小片。	ナデ	ナデ	茶色 茶色	石・長（1） ○		
34	甕	残高　1.3	折曲口縁。口縁下端部に刺目を施す。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳黄茶色 乳黄茶色	石・長（1～2） 金 ○		

表32　ＳＸ１出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
35	甕	口径（23.0） 残高　1.5	折曲口縁。口縁端面に１条の沈線が巡る。	ナデ ヨコナデ	ヨコナデ ミガキ	茶褐色 茶褐色	石・長（1～2） ○	黒斑	

第５章　調査の成果と課題

本書掲載の祝谷畑中遺跡２次調査・道後今市遺跡７次調査・道後今市遺跡 11 次調査は、道後城北遺跡群内における縄文時代から中世に至る集落の範囲や構造解明を主目的として調査を実施したものである。その中でも特に道後今市遺跡７次調査については、明治時代に平形銅剣 10 口が出土したと伝えられる地点でもあるため、平形銅剣に関する資料存在の有無についても慎重に調査を行った。

ここでは、各調査地における集落の立地や構造・変遷などについて時代ごとにまとめることとする。なお、各遺跡名は「祝谷畑中２次」「道後今市７次」「道後今市 11 次」と略して記す。

１．縄文時代

縄文時代の遺構・遺物で最も注目されるのが、道後今市 11 次ＳＫ１出土の石錘である。このＳＫ１の土層は基本土層第Ⅴ層とほとんど見分けがつかないくらいの質感・色調であったが、石錘 22 点がまとまりをもって出土したことからひとつの遺構として報告した。道後今市７次の基本土層第Ⅶ層黄褐色シルト及び道後今市 11 次の基本土層第Ⅴ層黄色微砂質土は、松山平野内でいわゆる縄文時代後～晩期の包含層である黄色シルトと同一土層と考えられる。この時代の遺構としては、文京遺跡 11 次調査において後期の屋外炉が検出されているほか、近年、文京遺跡 44 次調査において縄文時代後期の水田跡が検出されていることなどから、後期において安定した生業・生産が行われていたことが明らかである。

２．弥生・古墳時代

(1) 弥生前期

道後今市 11 次竪穴住居ＳＢ１内において前期土器が数点出土している。周辺遺跡をみると文京遺跡４次調査で前期の竪穴住居２棟が確認されている。そのことからも道後今市遺跡内でも竪穴住居が検出される可能性は高いといえる。祝谷畑中２次では、同遺跡１次調査で検出した前期末～中期中葉の大溝に関連する集落遺構の検出が期待されたが、検出することはできなかった。

(2) 弥生中期中葉

道後今市 11 次竪穴住居ＳＢ１の埋没時期は遺物の検証から中期中葉であると考えられる。そのため、従来より中期中葉段階になると遺跡立地の中心が丘陵部に移っていくと考えられているが、本例をみると中期中葉においても扇状地に集落が立地していることが明らかとなった。

(3) 弥生中期後半～古墳初頭

道後今市７次ＳＫ４は断面形態が一部袋状となる遺構で、中期後半の一括性の高い弥生土器が出土している。このことから貯蔵穴と推定される遺構である。またＳＤ２は深さ約１m、推定幅４mを超える中期後半～古墳時代初頭の間存続していたと推定される大溝である。またその形状が「Ｌ」字状に折れ曲がっていることから集落を区画する溝であると推定されるが、今後はその内区に存在する集落の性格や様相について明らかにしていく必要があろう。

また道後今市 11 次において検出したＳＤ１の埋没時期は、ＳＢ１との新旧関係より中期中葉以降と推定している。その性格については周辺遺跡の調査事例との検証が必要であろう。

一方、祝谷畑中２次では、包含層などから弥生土器や古墳時代の土師器・須恵器が出土していることから、周辺地域でこれらの時代の集落が検出される可能性が高い。

(4) 平形銅剣出土推定地

道後今市７次は平形銅剣出土推定地と考えられていたため、その情報取得に期待されたが、直接的な資料は得ることができなかった。

３．古代・中世

道後今市７次の包含層中において奈良時代に比定される遺物が出土している。周辺の当該時期の遺跡をみてみると、松山大学構内遺跡２・３次調査において遺構・遺物を多数検出している。また岩崎遺跡では溝を検出したほか、畿内産土師器や土馬なども出土している。これらのことから今後は道後今市遺跡内での調査の際に留意すべき点であろう。

また祝谷畑中２次で 12 世紀後半に人為的に掘削されたと推定される断面Ｖ字形の溝ＳＤ１を検出している。また、13 世紀代の溝ＳＤ２も検出している。近隣の同遺跡１次調査においても同時期の遺物が出土していることから、今後は集落関連遺構の検出が期待される。

本書掲載の調査では、道後城北遺跡群内における縄文時代から中世に至る集落の様相が明らかとなった。平野部に位置する道後今市７次と 11 次が主に縄文時代と弥生時代の、丘陵部に位置する祝谷畑中２次が主に古代と中世の遺構・遺物を確認したことで、多くの新しい情報を得ることができた。

その中でも最大の成果は、松山平野でいわゆる基盤層と呼んでいる黄色シルト層から縄文時代後期の石錘が道後今市 11 次において出土した点が挙げられる。そのほか、弥生時代中期中葉の竪穴住居が平野部で検出され、さらには住居内での石器製作の可能性も考えられることから、今後周辺地域での同様の遺構の検出が期待される。また道後今市７次の弥生時代中期後半の「Ｌ」字状を呈する大溝の検出は、今後弥生時代集落の構造を知るうえで重要な資料となるものである。また古代・中世における集落の様相が判然としない道後城北遺跡群において、祝谷畑中２次で検出した 12 ～ 13 世紀の遺構と遺物は集落の様相を知るうえで貴重な手がかりとなるものである。一方、古墳時代の集落に関する情報はほとんどなかった点も注目されるものである。こうした調査成果をもとに今後も各時代における集落の範囲やその構造について追求していく必要があろう。

写真図版

写真図版データ

1．遺構は、主な状況については、4×5判や6×7判の白黒ネガフィルム・カラーリバーサルフィルムで撮影し、35㎜判で補足している。一部の撮影には高所作業車を使用した。

使用機材：

カメラ	トヨフィールド45A	レンズ	スーパーアンギュロン90㎜他
	アサヒペンタックス67		ペンタックス67　55㎜他
	ニコンニューFM 2		ズームニッコール28～85㎜他
フィルム	白　黒　ネオパンSS・アクロス		

2．遺物は、4×5判で撮影した。巻頭原色図版の他は、すべて白黒フィルムで撮影している。

使用機材：

カメラ	トヨビュー45G
レンズ	ジンマーS 240㎜F5.6他
ストロボ	コメット/CA32・CB2400
スタンド等	トヨ無影撮影台・ウエイトスタンド101
フィルム	白　黒　ネオパンアクロス
	カラー　フジクロームプロビア100F

3．単色図版は、白黒プリントを等倍で使用できるように焼き付けているが、一部はカラープリントを使用した。

使用機材：

引伸機	ラッキー45MD・90MS
レンズ	エル・ニッコール135㎜F5.6A・50㎜F2.8N
印画紙	イルフォードマルチグレードⅣRCペーパー

4．製版　写真図版175線
印刷　オフセット印刷
用紙　ニューVマット
製本　無線綴じ

【参考】『埋文写真研究』vol.1～20　『報告書制作ガイド』

［大西朋子］

1．調査前全景（西より）

2．遺構検出状況（北より）

図版２

1．遺構検出状況（南より）

2．遺構検出状況（東より）

1. 遺構完掘状況（南より）

2. 東壁土層（西より）

図版 4

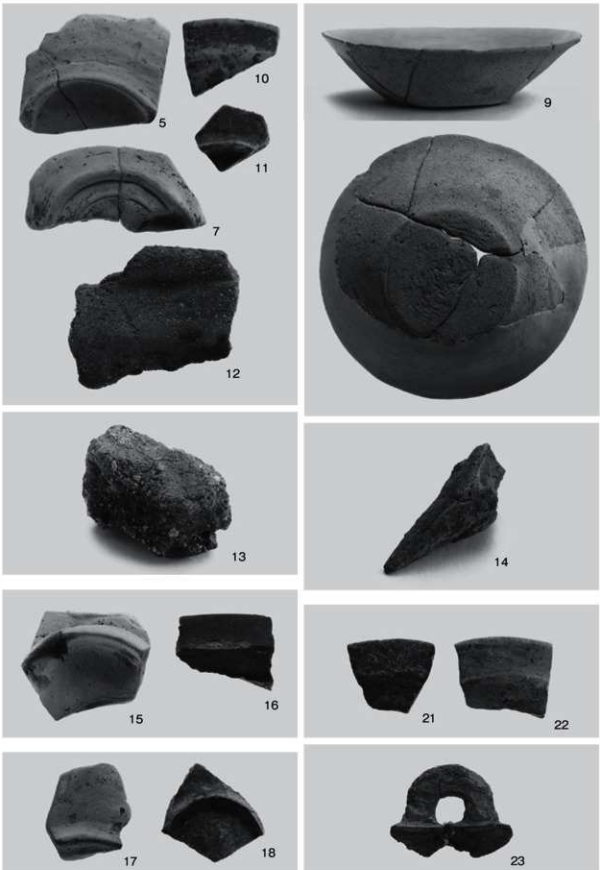
1．遺構完掘状況（東より）

2．ＳＤ１完掘状況（北より）

1．遺構完掘状況（東より）

2．ＳＤ１完掘状況（北西より）

図版6



1．出土遺物（ＳＤ１：5・7・9～14、ＳＤ２：15・16、ＳＤ３：17・18、第Ⅳ層：21～23）

1. 調査地全景（西より）

2. 完掘状況（西より）

図版 8

1．北壁土層（南より）

2．南壁土層（北西より）

1. ＳＤ１完掘状況（西より）

2. ＳＤ２完掘状況①（西より）

図版10

1．ＳＤ２完掘状況②（南東より）

2．ＳＤ２下層遺物出土状況①（東より）

1. ＳＤ２下層遺物出土状況②（南より）

2. ＳＤ２上層遺物出土状況（南より）

図版12

1. ＳＫ１完掘状況（西より）

2. ＳＫ２完掘状況（北より）

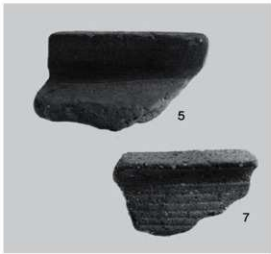
1．ＳＫ３完掘状況（南より）

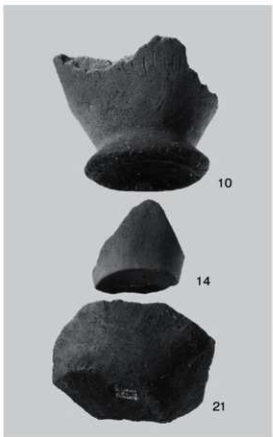
2．ＳＫ４半截状況（西より）

図版14

1．ＳＫ４遺物出土状況（北より）

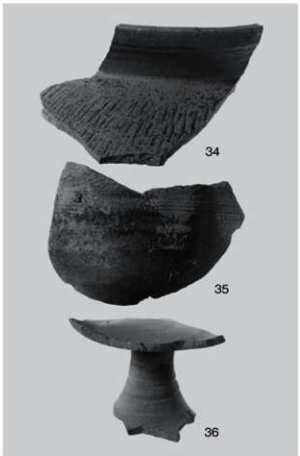
2．作業風景（西より）





1. ＳＤ２出土遺物

図版16

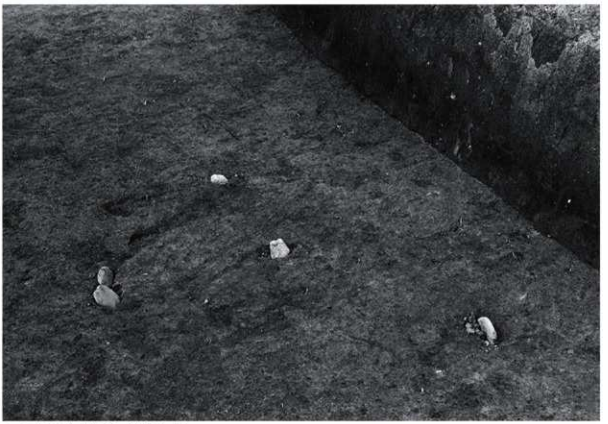


1. ＳＫ４出土遺物（30・32）、包含層出土遺物（34～36・39・40）、グリッド出土遺物（46・58・60）、撹乱出土遺物（72）

1. 調査前風景（南東より）

2. 遺構検出状況（北より）

図版 18



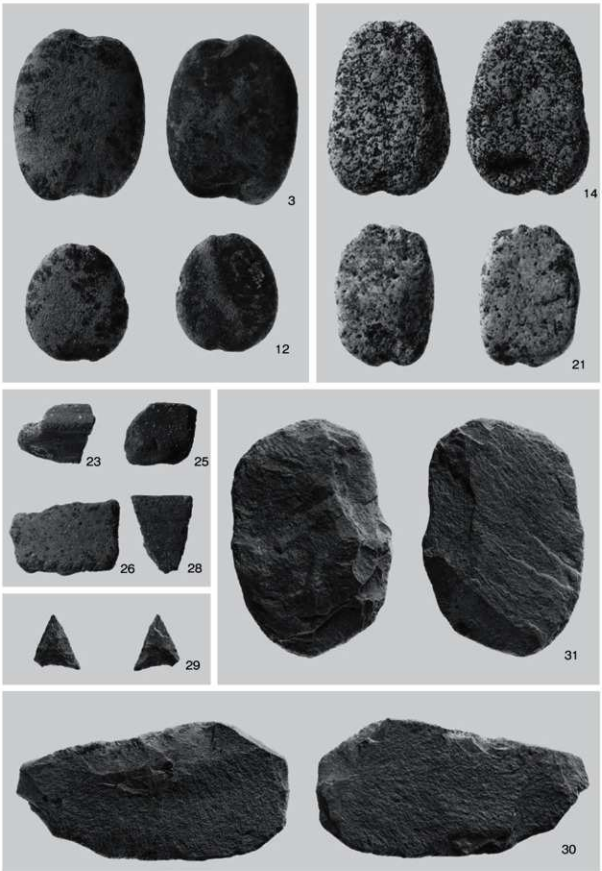
1．石鏃出土状況①（南東より）

2．石鏃出土状況②（南より）

1. ＳＢ１完掘状況（北東より）

2. 遺構完掘状況（北より）

図版 20



1．出土遺物（ＳＫ１：3・12・14・21、ＳＢ１：23・25・26・28～31）

報告書抄録

ふりがな	いわいだにはたけなかいせき・どうごいまいちいせき・どうごいまいちいせき
書名	祝谷畑中遺跡2次調査・道後今市遺跡7次調査・道後今市遺跡11次調査
副書名	国庫補助市内遺跡発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	松山市文化財調査報告書
シリーズ番号	第150集
編著者名	重松佳久・宮内慎一・河野史知・山之内志郎
編集機関	財団法人松山市文化・スポーツ振興財団埋蔵文化財センター
所在地	〒791-8032　愛媛県松山市南斎院町乙67番地6　　TEL 089-923-6363
発行年月日	西暦2011（平成23）年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
いわいだにはたけなかいせき 祝谷畑中遺跡 2次調査	いわいだに 祝谷二丁目263番6	38201		33°51′24″	132°46′50″	20051111 / 20051118	61.4	個人住宅建設
どうごいまいちいせき 道後今市遺跡 7次調査	どうごいちまん 道後一万775番1 道後一万775番7 道後一万775番8	38201		33°50′57″	132°46′33″	19900207 / 19900331	379.53	個人住宅建設
どうごいまいちいせき 道後今市遺跡 11次調査	どうごいまいち 道後今市998番14	38201		33°51′00″	132°46′45″	19980226 / 19980331	199.38	個人住宅建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
いわいだにはたけなかいせき 祝谷畑中遺跡 2次調査	集落	古代	溝 柱穴	土師器・須恵器・瓦器・窯壁・鉄器	断面V字形溝の検出
		古代末～中世	溝	土師器・瓦器	
どうごいまいちいせき 道後今市遺跡 7次調査	集落	弥生時代	土坑	弥生土器	貯蔵穴の検出
		弥生～古墳時代	溝	弥生土器	「L」字状大溝の検出
		古墳時代以前	掘立柱建物 溝・土坑 包含層他	弥生土器 弥生土器 弥生土器・土師器・須恵器・瓦質土器・石鏃・鉄器	施の出土
どうごいまいちいせき 道後今市遺跡 11次調査	集落	縄文時代	土坑	石鏃	石鏃の出土状況
		弥生時代	竪穴住居 土坑 柱穴	弥生土器・縄文土器・石鏃・大型石器 弥生土器	石器の製作
		中世以降	土坑・柱穴		

要約　祝谷畑中遺跡2次調査では、12世紀後半に比定される断面V字形の溝を検出した。道後今市遺跡7次調査では、弥生時代中期後半～古墳時代初頭の「L」字状に折れ曲がる溝を検出した。また同遺跡11次調査では弥生時代中期中葉に比定される竪穴住居を検出したほか、縄文時代後期の石鏃22点がまとまって出土している。これらは道後城北地域の縄文時代～中世における集落の広がりを知る貴重な資料である。

松山市文化財調査報告書　第150集

祝谷畑中遺跡　2次調査
道後今市遺跡　7次調査
道後今市遺跡 11次調査

国庫補助市内遺跡発掘調査報告書

平成23年3月31日　発行

発　行　松山市教育委員会
〒790-0003　松山市三番町六丁目6番地1
TEL（089）948-6605

編　集　財団法人 松山市文化・スポーツ振興財団
埋蔵文化財センター
〒791-8032　松山市南斎院町乙67番地6
TEL（089）923-6363

印　刷　岡田印刷株式会社
〒790-0012　松山市湊町7丁目1-8
TEL（089）941-9111